

5  
魚  
類



## 5 魚類

「広島県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック ひろしま」では 14 種が選定され、改訂版では 18 種が、第 3 版では 37 種が選定されている。選定種が増加したのは、種が分割整理されたことも要因であるが、調査範囲が淡水域から汽水域下部（潮間帯）まで広げられたことが大きい。今回の改訂では、従来の調査域（淡水域・汽水域）に海域を含めて見直しを行った。その結果、17 科 57 種を選定し、1 科 2 種を選外とした。新しく選定された淡水魚（両側回遊魚を含む）は 3 科 3 種であり、海産魚は 9 科 19 種である。

海産魚類は、瀬戸内海産魚類目録（瀬戸内海水産開発協議会編 1997）に 162 科 526 種の魚類が報告され、県下ではおおよそ 460 種が記録されている（吉郷 2018）。これらの多くは浅海域に生息する魚種で、水産的に有用な漁獲対象種であり、また、食用とされている魚種が多く含まれている。個体数の増減は漁獲によるものか、環境の変化によるものか、判断は困難であり、水産的に有用な漁獲対象種は人為的攪乱が大きいと考えられるため、今回の対象種としなかった。しかし、例外として、海砂採取による生息環境の破壊が個体数減少の一因であるイカナゴは絶滅危惧Ⅱ類とした。今回の海産魚類の調査範囲は、概ね、渚線から沖へ投げ釣りで届く範囲とし、この範囲ではいくつかの調査ポイントを設定して、個体数密度や経年変化などから対象種を選定した。また、感潮域の泥底では大潮の干潮時に地曳網を使用して採集した。その結果、9 科 19 種の海産魚を選定した。内訳は、絶滅危惧Ⅱ類が 2 種、準絶滅危惧が 3 種、情報不足が 14 種である。人為的改変を受けやすい特異な感潮域に生息しているシロチチブは県東部の軟泥環境からわずかに記録されているに過ぎないことから絶滅危惧Ⅱ類とした。アユキセジロハゼは既知の分布域とは著しく離れた広島県に特異な個体群が確認されていること、ショウキハゼは改変が著しい特異な干潟環境を生活環の中で利用していること、フタスジカジカは全国的に知見が乏しいにも関わらず、県下の生息環境の改変を受けやすい場所において複数の生息情報が存在することから準絶滅危惧とした。残りの 14 種は知見が少なく、情報不足とした。

一方、従来の調査域（淡水域・汽水域）や両側回遊魚では、11 科 35 種を選定した。内訳は絶滅種が 2 種、絶滅危惧Ⅰ類が 9 種、絶滅危惧Ⅱ類が 7 種、準絶滅危惧が 15 種、地域個体群が 1 種、情報不足が 1 種である。選定にあたっては、本県が分布域の境界（東限や西限）に位置していること、分布域が古地理を反映していると考えられること、生態系の典型性を反映していること、個体数や生息地が少ないことなどを考慮して選定した。35 種のうち、24 種はカテゴリーの変更はなかった。カテゴリーの変更があった 11 種のうち、ランクが上がった種はルリヨシノボリ 1 種のみである。ルリヨシノボリの生息域は芸南地方や島嶼部の小河川に局限されており、近年の集中豪雨により下流域の環境が変わり、個体数が激減したので絶滅危惧Ⅱ類とした。また、カワヨシノボリ斑紋型は北広島町八幡地域に局限され、個体数も激減しているので、新カテゴリーの地域個体群とした。また、サクラマス・サツキマス・ゼゼラ・タモロコ・カワヒガイ・ヌマムツ・マサゴハゼの個体数や生息環境の変化は少なく、要注意種から新カテゴリーの準絶滅危惧に変更した。ランクが下がった種はカジカ中卵型が絶滅危惧Ⅰ類から絶滅危惧Ⅱ類へ、チュウガタスジシマドジョウが絶滅危惧Ⅱ類から準絶滅危惧へ、2 種のみである。カジカ中卵型は下流域と沿岸域の環境、その連続性が改善してきたと考えられ、また、周辺の小河川にも分散していることが確認された。チュウガタスジシマドジョウは多くの河川で個体数の増加が確認されたのでランクダウンさせた。さらに、スミウキゴリやゴクラクハゼは小河川において生息情報や個体数の増加が確認されたので選外とした。

新たに、ニホンウナギ・ヤリタナゴ・ドジョウを選定した。ニホンウナギは多くの河川で漁協放流さ

れており、これは国内移入種と考えられる。一方、放流が行われておらず天然遡上と考えられる小・中河川では、30年ほど前と比べて幼魚を中心に個体数の減少が著しいので準絶滅危惧とした。ヤリタナゴは産卵母貝の減少に伴い、個体数の減少が著しいので準絶滅危惧とした。黒瀬川では絶滅に近い状態である。ドジョウは河川と水田との連続性が少なくなり、また、圃場整備により乾田化がすすみ、個体数の減少が著しいので準絶滅危惧とした。

和名・学名については 中坊徹次編 日本産魚類検索全種の同定第三版に従ったが、一部の魚種では例外がある。

(魚類調査部会)

## 魚類選定種

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| 絶滅 (EX)           | 14 サツキマス (アマゴ) |
| 1 サケ (シロザケ)       | 15 ゼゼラ         |
| 2 アユモドキ           | 16 タモロコ        |
| 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)  | 17 カワヒガイ       |
| 1 スナヤツメ南方種        | 18 ヌマムツ        |
| 2 ゴギ              | 19 ニホンウナギ      |
| 3 スイゲンゼニタナゴ       | 20 ヤリタナゴ       |
| 4 イシドジョウ          | 21 ドジョウ        |
| 5 サンヨウコガタスジシマドジョウ | 情報不足 (DD)      |
| 6 カマキリ (アユカケ)     | 1 カワアナゴ        |
| 7 キセルハゼ           | 2 イドミミズハゼ      |
| 8 チワラスボ           | 3 ナガミミズハゼ      |
| 9 タビラクチ           | 4 オオミミズハゼ      |
| 絶滅危惧 II 類 (VU)    | 5 ヤリミミズハゼ      |
| 1 シラウオ            | 6 ヒメギンポ        |
| 2 カジカ大卵型          | 7 アマクサヨウジ      |
| 3 カジカ中卵型          | 8 キツネメバル       |
| 4 オヤニラミ           | 9 コウライヨロイメバル   |
| 5 エドハゼ            | 10 モヨウダイナンギンポ  |
| 6 チクゼンハゼ          | 11 セトカジカ       |
| 7 ルリヨシノボリ         | 12 イダテンカジカ     |
| 8 シロチチブ           | 13 オビアナハゼ      |
| 9 イカナゴ            | 14 ニラミハゼ       |
| 準絶滅危惧 (NT)        | 15 シマフグ        |
| 1 アブラボテ           | 地域個体群 (LP)     |
| 2 チュウガタスジシマドジョウ   | 1 カワヨシノボリ斑紋型   |
| 3 アカザ             |                |
| 4 ミナミメダカ          |                |
| 5 クルメサヨリ          |                |
| 6 クボハゼ            |                |
| 7 ウキゴリ            |                |
| 8 トビハゼ            |                |
| 9 マサゴハゼ           |                |
| 10 アユキセジロハゼ       |                |
| 11 ショウキハゼ         |                |
| 12 フタスジカジカ        |                |
| 13 サクラマス (ヤマメ)    |                |

**サケ(シロザケ) 絶滅(EX) EX-②, EX-③**

*Oncorhynchus keta* (Walbaum, 1792)

サケ目 サケ科

環境省: なし

広島県 2011: EX

広島県 2003: CR+EN

概要	日本海・オホーツク海・ベーリング海・北太平洋に分布し、繁殖期には河川に母川回帰する。江の川水系の馬洗川に遡上していたことが藝藩通志(五)備後國三次郡(三)の「物産の章」に記述されている。また、吉田村にも記述があることから、可愛川にも遡上していたと思われる。明治時代までは三次(十日市あたり)まで遡上しており、採集漁具も収集され、「三次風土記の丘」に寄託されている。しかし、浜原ダムや熊見発電所の構築により、絶滅したと考えられる。現在は1980年代に島根県が河川の啓発運動の一環として放流した子孫が支流の濁川や三谷川に遡上しているが、一部は本県の長瀬川や本流の鳴瀬堰まで遡上していることが確認されている。個体数はきわめて少ない。
生息・生育状況	近年は「江の川サケの会」により、三次の巴橋周辺で稚魚の放流がおこなわれていたが、最近では三次市高宮の長瀬川で放流されている。しかし、遡上個体は数個体に留まっている。シロザケの南西限は九州の遠賀川であり、浜原ダムの下流や高津川では遡上個体があり、広島県にも在来個体群が遡上しないと断言はできないが、江の川の下流や本県に遡上する個体は絶滅後に放流された個体が母川回帰したと判断される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	ダムや取水堰などの河川工作物が遡上の障害となっている。また、魚道はあっても水量が少なく、遡上できない魚道も多い。繁殖期(遡上期)には魚道を遡上できる水量を確保することが必要である。
特記事項	因原付近(島根県)では繁殖行動を観察するエコツアーが開催され、河川啓発に本種が利用されている。また、三次市高宮でもサケの稚魚が放流されており、秋季にはエコツアーが開催され、遡上魚類(アユ・ウナギ・サクラマス)の保護キャンペーンに利用されている。
産地情報	三次市(三次, 作木), 安芸高田市(高宮, 甲田)

頼 杏坪 1825. 藝藩通志(複製版) 卷五. 127 pp. 藝藩通志刊行会, 広島.

内藤順一 2015. 濁川のシロザケ. 比婆科学, 253: 17.

(内藤順一)

**アユモドキ 絶滅(EX) EX-①, EX-②, EX-③**

*Parabotia curta* (Temminck & Schlegel, 1846)

コイ目 ドジョウ科

環境省: CR

広島県 2011: EX

広島県 2003: CR+EN

概要	琵琶湖淀川水系、岡山県の旭川・吉井川に分布する。成魚は河川や用水路などの緩流部を好み、砂礫底や砂泥底の隠れ場のある場所で生活をする。本流では護岸の割れ目などで出入りする行動が目撃されることが多い。全長5~15cmで茶褐色をしており、幼魚は黒い横縞が7~8個あるが、成長すると不明瞭になる個体もいる。口ひげは6本あり、ドジョウ科のドジョウやオオシマドジョウ(旧名シマドジョウ)に近い種類であるが、体高が高く、芦田川水系では「あーもん」と呼ばれていた。
生息・生育状況	1935年頃に福山市郷分町付近でしばしば採集されていたという。戸手商業高校生物部が芦田川中流域から1962年に採集した標本の中に本種が含まれていたが、2019年にその個体は旭川産であることが判った。本種の繁殖場所は、用水路の堰上げによって生じる、一時的な水路内の水没草本が生育している場所であるが、そうした環境は圃場整備事業や河川整備により消失し、本種は絶滅したと考えられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	本種は降雨や梅雨期に一時的に水没する陸生植物が繁茂する休耕地や寄洲に侵入して繁殖することが知られている。こうした場所は圃場整備事業や河川整備により芦田川水系では消失したと考えられる。本川と用水路、用水路と繁殖場所という水の繋がりが必要である。
特記事項	内藤(1982)で報告された芦田川唯一の個体は、旭川産であることが判明した。しかし、1985年に発刊された宮原哲三氏の「芦田川」や1988年に発刊された宮原哲三氏の「続・芦田川」にはアユモドキの記述がある。また、1809年に編纂された「福山志料」にも記述があり、芦田水系に生息していたことは明白である。国天然記念物、国内希少野生動物種。
産地情報	福山市(神辺)

宮原哲三 1985. 芦田川. 174 pp. 芦田川文庫 1, 福山.

宮原哲三 1988. 続・芦田川. 142 pp. 芦田川文庫 12, 福山.

(内藤順一)

**スナヤツメ南方種 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-①, CR+EN-②**

*Lethenteron* sp. S

ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科

環境省: VU

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	本州, 四国, 九州に分布し, 近畿北方以東では北方種と混棲する。全長 10~16 cm, 淡褐色であるが, 繁殖期には金属光沢に近い婚姻色を呈する。上顎・下顎がなく, 口は丸く, 円口綱(現在は頭甲綱:ヤツメウナギ綱)の名前は口の形に由縁する。江の川の河口ではカワヤツメ(全長約 40 cm)が生息するが, これまでのところ, 広島県への遡上記録はない。繁殖期は 5~7 月, 数匹~十数匹の群れで砂礫底に産卵する。孵化仔魚は泥底に潜り, 約 3.5 年生活する。この期間の個体はアンモシーテス幼生と呼ばれ, 3 年目の秋から春先に変態し, 眼と吸盤状の口器を持つ成体になり, 繁殖地の砂礫底に遡上し, 繁殖後は雌雄ともに死滅する。
生息・生育状況	本種は一生のほとんどを泥底の中で過ごすため, 目撃するのは変態期から産卵場に集結する繁殖期の 3~7 月の数か月間だけである。そのため, 多くの河川で生息が気付かれることなく死滅したと考えられる。また, ダムや堰の構築にともなう減水区間の増加や平坦化にともないワンド環境の減少も影響している。太田川水系では標高 15 m の安佐大橋付近から標高 800 m の北広島町八幡まで分布しており, 八幡湿原では個体数が多い。
存在を脅かす要因・保全の留意点	本種は幼生期を泥底で過ごし, 繁殖場所は砂礫底である。流速の遅い泥底と流速がやや速い砂礫底が同じ場所に存在しないと個体数維持が困難である。近年の河川管理に見られる, 直線化・平坦化では泥底環境はできにくく, 各地で絶滅していると考えられる。
特記事項	近年, 本種は遺伝的に識別される南方種と北方種に細分された。分布域上, 本県に分布する個体群はスナヤツメ南方種と考えられる。
産地情報	広島市(安佐南区, 安佐北区, 佐伯区), 呉市(呉), 三原市(本郷), 三次市(三次, 君田, 作木, 三良坂), 庄原市(庄原, 西城, 東城, 高野, 比和), 東広島市(志和, 黒瀬, 福富, 豊栄, 河内), 安芸高田市(高宮), 安芸太田町(加計, 戸河内), 北広島町(芸北, 千代田)

内藤順一・田村龍弘・河野暁彦 2014. 北広島町の淡水魚類. 北広島町の自然, 501-520. 22 pls. 資料 6. 北広島町教育委員会, 広島.

内藤順一 1994. 増補・改訂版 広島県の淡水魚.(比婆科学教育振興会編), p. 2-7. 中国新聞社, 広島.

(内藤順一)

**ゴギ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-①, CR+EN-②, CR+EN-③**

*Salvelinus leucomaenis imbricus* Jordan & McGregor, 1925

サケ目 サケ科

環境省: VU

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	イワナ属の地方亜種である。西・中央中国山地の脊梁部に分布し, 山陰では斐伊川から高津川まで, 山陽では高梁川から佐波川まで生息するが, 佐波川の個体は山陰側から移入されたとする伝承があり, また, 三坂川(高梁川)や小河内川(錦川)でも移入されたという。県内に分布するゴギは江の川水系では在来種であるが, 太田川水系のゴギは明治年間から近年までに移入された伝承が残っている。夏季水温が 18℃以下の最上流域に生息し, 川幅が 1 m 程度でも水量があれば生息可能である。頭頂まで腫大の白斑があることで近隣に分布するニッコウイワナと区別されるが, ニッコウイワナにも頭頂に白斑を有する個体も確認されている。
生息・生育状況	標高 600~900 m の支流に生息し, 生息環境は安定していたが, スキー場の造成による皆伐や大規模林道の造成により支流に土砂が流れ込み, 礫間が埋まり, 水生昆虫が激減した地域が確認されている。また, 植林地の皆伐による保水力の低下も確認されている。ゴギの代わりにニッコウイワナを放流する漁業組合や他地域からゴギの稚魚を放流しプライベート釣場を造成しようとする団体もあり, 近年, 生息環境は良好とはいえない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	皆伐により枝川へ土砂が流入し, 生息環境を壊している。また, 中国山地脊梁部に建設される風力発電のための搬入道路の新設と拡幅にともなう土砂の流入により, 目詰まりを起こしている溪流が多い。近年, 頻発している想定外の豪雨にともなう崩落などが源流端まで見られるようになり, 生存が脅かされている。
特記事項	在来個体群の生息地に他地域からの放流やニッコウイワナなどの近縁種の放流により, 遺伝的攪乱を生じさせている支流がある。また, ゴギ域にアマゴやヤマメを放流すると, ゴギがさらに上流に追いやられ, 生息域が少なくなり, 個体数の減少につながるし, 小型サンショウウオ類の減少にも影響していると考えられる。県天然記念物(庄原市西城町), 庄原市天然記念物(西城町熊野)。
産地情報	三次市(三次, 君田, 布野), 庄原市(庄原, 西城, 東城, 口和, 高野, 比和), 廿日市市(佐伯, 吉和), 安芸高田市(美土里, 高宮, 甲田), 安芸太田町(加計, 筒賀, 戸河内), 北広島町(芸北, 大朝)

内藤順一 2015. 広島県北広島町および庄原市におけるゴギ *Salvelinus leucomaenis imbricus* の繁殖行動. 高原の自然史, 16: 35-61.

内藤順一 2017. 繁殖時におけるゴギ *Salvelinus leucomaenis imbricus* の優勢雄による利己的な行動. 高原の自然史, 17: 1-11.

(内藤順一)

スイゲンゼニタナゴ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-①

*Rhodeus smithii smithii* (Regan, 1908)

コイ目 コイ科

環境省: CR

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	山陽地方の一部に分布。平地部の緩流域を好み、おもに砂底や砂礫底で水の豊富な水路等に生息。食性は附着藻類を中心とする雑食性で、淡水二枚貝の中に産卵。別亜種のカゼトゲタナゴよりも体高が低い、体側にある暗青色の縦線の起点がわずかに太く、体の透明感が強い傾向がみられるが、未成魚における区別は困難。同所的に生息するタイリクバラタナゴは、下顎が角張って口が前端(本亜種ではやや下位)に位置し、暗青色の縦線の起点が背鰭の下(より前方)から始まり、幼魚の背鰭に見られる黒斑もやや伸張した三角形(楕円形)をしている。成熟した雄では腹縁が黒く縁取られる。約1年で成熟し、平均寿命は2年未満と考えられる。
生息・生育状況	広島県では芦田川水系の一部に生息している。かつては福山平野や神辺平野に広く分布していたと考えられるが、現在はきわめて狭い範囲にわずかに残存し、絶滅寸前である。これまで生息していたのは恒常的に水量が維持された用水路、流れの緩やかな支流等の比較的浅い場所で、底質は砂あるいは砂礫で淡水二枚貝が生息する緩流域であった。近年では越冬地と繁殖地を分けて利用していることが解明されつつある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	市街地に生息するため、常に開発行為や汚濁の危険があり、生息環境の維持には地域住民の理解が必要。きわめて個体数が少なく、わずかな個体の動向にも影響を受け、外来種やサギ類による捕食も懸念される。個体群縮小にともなう遺伝的多様性の低下が懸念され、近年では奇形個体も散見される。交雑可能な外来種の侵入による遺伝的汚染も懸念される。インガイ等の淡水二枚貝は産卵基質であり、本種の生息条件において必須である。
特記事項	1回の産卵における卵数は10粒以下ときわめて少なく、日本産タナゴ類の中でもっとも繁殖率が低い。本亜種の遺伝的な多様性は非常に低いが、カゼトゲタナゴや大陸産別亜種とは明瞭な遺伝的差異が認められる。県下の個体群は絶滅寸前で、遺伝的多様性も低下している。民官学共同の協議会や市民団体によって保全対策が進められており、系統保存もされている。なお、法令での学名は <i>Rhodeus atremius suigensis</i> が使用されているが、本亜種と同一である。国内希少野生動物種、県指定野生生物種。
産地情報	福山市

河村功一 2013. 日本産魚類検索第三版におけるスイゲンゼニタナゴ *Rhodeus atremius suigensis* の取扱いとその問題点について. 魚類学雑誌, 60: 191-193.

芦田川水系スイゲンゼニタナゴ保全地域協議会 2020. 第69回魚類自然史研究会関連シンポジウム スイゲンゼニタナゴの過去・現在・未来～芦田川の魚の保全に向けて～報告書. 福山.

(吉郷英範)

インドジョウ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-①, CR+EN-②

*Cobitis takatsuensis* Mizuno, 1970

コイ目 ドジョウ科

環境省: EN

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: VU

概要	オオシマドジョウやスジシマドジョウ類の幼体に似ているが、成体は全長8cmを超えることはない。淵尻の浮石環境をおもな生息場所としており、広島県・島根県・山口県・福岡県に分布する日本固有種である。地色は黄色から淡黄色で、背中や体側には黒い縦帯があり、もっとも顕著な黒色縦帯(L5)は体側中央部にあり、頭部から尾柄部付近までつながっていることが多い。とくに、黒色縦帯の前端は眼を横切り、吻端にまで達するのが特徴である。太田川水系ではもっとも太い黒色縦帯(L5)は一直線型が多く、江の川水系では点列型をしており、地理的変異があることが知られている。
生息・生育状況	以前は標高300～500mの水のきれいな中流域に生息すると考えられていたが、太田川本流では山陽道下流(標高15m)から廿日市市吉和の670mまで生息しており、生息環境は水温(標高)や流速(河川形態)よりも、河床材料に影響されると考えられ、浮石の礫底であれば生息の可能性がある。近年、河川整備により、平坦化・直線化が推奨され、淵が消滅している。
存在を脅かす要因・保全の留意点	河川の平坦化や直線化により、淵が消滅し、浮石環境が少なくなっている。また、ダムや農業堰などの構築により、水量が減少し、生息環境を縮小させていると考えられる。浮石環境からの伏流水は夏季では冷たく、冬季では暖かく越冬に適している。フラッシュ放流などは礫間の目詰まりを軽減させると考えられる。とくに、集中豪雨による小氾濫は本種の生息環境復元には効果が大きい。
特記事項	本種は1970年に新種記載された淡水魚で、分布や生態が十分研究されていない。近年、シマドジョウ属はある程度まとめられたが、本種は分布域が局限されており、古地理を考える上で重要な種と考えられる。
産地情報	広島市(安佐南区, 安佐北区, 佐伯区), 三次市(三次, 君田, 布野, 作木, 三良坂), 庄原市(庄原, 総領, 西城, 口和, 高野, 比和), 廿日市市(吉和), 安芸高田市(八千代, 美土里, 高宮), 安芸太田町(加計, 筒賀, 戸河内), 北広島町(芸北, 千代田)

中島 淳・内山りゅう 2017. LOACHES OF JAPAN. 223 pp. 山と溪谷社, 東京.

内藤順一 1994. 増補・改訂版 広島県の淡水魚.(比婆科学教育振興会編). p. 124-127. 中国新聞社, 広島.

(内藤順一)

## サンヨウコガタスジシマドジョウ

絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②, CR+EN-⑤

環境省: CR

*Cobitis minamorii minamorii* Nakajima, 2012

広島県 2011: CR+EN

コイ目 ドジョウ科

広島県 2003: VU

概要	コガタスジシマドジョウは分布域により 5 亜種に分けられるが、本亜種は兵庫県揖保川水系から広島県芦田川水系までの山陽地方にのみ分布する。成魚はおもに平野部の小河川や農業用水路などの緩流部の砂泥底から砂底に生息する。岡山県では堰上げ灌漑が行われているエリアの水通しがよくて粗砂分が多い底質箇所が多い。口ひげは 3 対で、形態はチュウガタスジシマドジョウと似ているが、全長は 4.5~6 cm と小さく体は太く短い。尾鰭の弧状の横帯は乱れる場合が多い。繁殖期は 5~7 月で、河川の氾濫原や水田、水田周辺の小溝などの一時的水域に遡上して繁殖する。雌雄ともに 1 年で成熟し、繁殖後死亡する個体が多く、2 歳以上の個体は少ない。
生息・生育状況	本亜種は兵庫県揖保川水系から広島県芦田川水系までの山陽地方にのみ分布する。県内では芦田川中下流域周辺のみから知られるが、1990 年代後半以降確認されていない。既知の生息地周辺は、宅地化や道路整備、水田の構造改変、水質汚濁等が進み、生息環境が大きく劣化した。近年、確認されないことを踏まえ、県内ではすでに絶滅した可能性がある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	市街地化や農地整備等にもなう用水路のコンクリート化、普段の生息場所の恒久的水域と繁殖場所となる一次的水域との連続性の分断、一次的水域そのものの消失・縮小、生活排水の流入増による水質汚濁や底質環境の悪化等が生存への脅威である。良質な水質と底質および恒久的水域と一次的水域との連続性がセットで揃うことが生息条件で、開発や水路改修等に際しては、水質汚濁や底質の変質、水域の連続性への留意が必要である。
特記事項	本亜種はサンヨウ、トウカイ、サンイン、ビワ、ヨドの 5 亜種に区分されるコガタスジシマドジョウの基亜種である。芦田川水系は本亜種の分布の西限であることから、既知の生息地の重要性は高い。
産地情報	福山市 (福山, 神辺)

中島 淳 2017. サンヨウコガタスジシマドジョウ. 日本のドジョウ (中島 淳・内山りゅう編), p. 100-103. 山と溪谷社, 東京.

大北祐治 1991. スイゲンゼニタナゴ実態調査結果報告. 10 pp. 福山市教育委員会, 広島.

(中西 毅)

## カマキリ(アユカケ)

絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-⑤

環境省: VU

*Rheopresbe kazika* (Jordan & Starks, 1904)

広島県 2011: CR+EN

スズキ目 カジカ科

広島県 2003: なし

概要	神奈川以南・秋田以南の本州・四国・九州に分布する。カジカに酷似するが、成体は頭部が大きく、前鰓蓋骨に 4 本(2 対)の棘があり、これでアユをひっかけることからアユカケの名前がある。背面には 4 本の黒帯があり、腹面は白く、腹鰭はハゼ科のように吸盤状にならず二分する。河川(下流域)と沿岸(海)を 1 往復する降河回遊魚である。晩秋から初冬に降海し、繁殖は冬季に沿岸域で行われ、春季に稚魚が遡上する。下流域の流れの速い礫底で生活し、幼魚期には水生昆虫や小型の魚類を食べる肉食性である。
生息・生育状況	備北地方(江の川本流・西城川水系)には「牛ごっばつ・牛ごっぼ」と呼ばれる淡水魚が生息していたが、現在はその個体を確認できないことから、それがカマキリではないかと思われる。また、酷似するカジカ大卵型は「ならせ」と呼ばれ、区別されていたと考えられる。現在はカジカ大卵型や大きいドンコに対して「牛ごっばつ・牛ごっぼ」という呼称が使われている地域があるので注意が必要である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	ダム建設により遡上できなくなった。浜原ダム下流の因原や濁川には生息しているので、河川工作物の影響が大きいと考えられる。カジカ科は腹鰭が二分し、吸盤状にならないため、ハゼ科のように急流を遡上できない。とくに、河口堰などが構築されると絶滅する可能性が大きい。遡上には、河川勾配が小さく、水量の少ないカジカ類専用の魚道が有効である。
特記事項	芦田川や太田川からも記録があるが、根拠となる標本は存在せず誤同定の可能性がある。瀬戸内海側の河川は過去に分布していたのかもしれないが、1960 年代にはすでに生息していなかったのではないかと推測される。生息の記録は江の川水系のみであり、45 年間、個体が確認されていない。形態・生態・遺伝的に他のカジカ群と異なり、近年、カジカ属から本種のみから構成される <i>Rheopresbe</i> (カマキリ属)に移された。
産地情報	三次市 (三次, 布野, 作木, 三良坂), 庄原市 (庄原)

Goto, A., Yokoyama, R. & Kinoshita, I. 2019. Japanese catadromous fourspine sculpin, *Rheopresbe kazika* (Jordan and Starks) (Pisces:Cottidae), transferred from the genus *Cottus*. Environmental Biology of Fishes.

内藤順一 1994. 増補・改訂版 広島県の淡水魚(比婆科学教育振興会編). p. 204-205. 中国新聞社, 広島.

(内藤順一)

**キセルハゼ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②**

*Gymnogobius cylindricus* (Tomiyama, 1936)

スズキ目 ハゼ科

環境省: EN

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: なし

概要	体長 6 cm になり、頭はよく縦扁、体前部は円筒形、体後部は側扁し、体は細長い。口はやや斜行して、上顎後端は眼の後縁を越える。上顎は下顎より突出する。第 2 背鰭の軟条は 11~13 本、臀鰭軟条は 10~11 本、胸鰭軟条が 16~18 本。生時の体色は褐色で、腹部はやや白い。頭と体は下部を除き、不定形な暗色斑が散在し、体側中央で縦列する。尾鰭は下部 1/3 を除いて横縞がある。クボハゼとは体型や斑紋（体側や尾鰭）の相違で識別できる。また、クボハゼよりも細砂の底質、海域に近い環境を好む。中部地方の太平洋側から東シナ海沿岸の日本水域から知られている。産卵期は冬季から春季と考えられる。
生息・生育状況	河口干潟や湧水の影響がある前浜干潟で確認されており、生息環境は軟泥質でアナジャコ類の生息孔を利用していることが確認されている。生息地内でも限られた範囲でしか確認されておらず、既知生息地でもきわめて少数しか確認されていない。また、近年では豪雨の影響で土砂が河口域に流れ込み、干潟の性質が変性した生息地もあり、再確認ができなくなった場所もある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	埋め立てや護岸工事など生息環境の直接的な改変。有機汚濁の進んだ場所では確認できないことから、土砂流出等による汚濁防止、湧水や滞水の確保、アナジャコ類を含めた生息環境の保全などが重要である。また、このような環境が一定面積を確保され、周辺地域にも類似環境が形成されていることも重要である。河川や海流による土砂供給量の変化にともなう生息に適した環境の減少もあり、海流の変化にともなう仔魚が回帰できなくなる。
特記事項	本種は広島県で採集された標本に基づいて記載された種であるが、永らくクボハゼと混同されて情報がなかった。1994 年に両種が別種であることが再確認されて以後は日本各地から生息情報が増加しつつあるものの、依然として限られた地域から知られるのみである。
産地情報	広島市、呉市、尾道市（向島）、江田島市（能美）

吉郷英範 2015. 広島県の陸水性魚類. 比和自然科学博物館研究報告, 56: 91-181.10 pls.

Inui R., Koyama A., Akamatsu Y. 2018. Abiotic and biotic factors influence the habitat use of four *Gymnogobius* (Gobiidae) species in riverine estuaries in the Seto Inland Sea. *Ichthyological Research*, 65: 1-11.

(吉郷英範)

**チワラスボ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②**

*Taenioides snyderi* Jordan & Hubbs, 1925

スズキ目 ハゼ科

環境省: CR

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: なし

概要	体は細長く伸張し、全長 20 cm になる。口は大きく上向きで鋭い歯が並ぶ。下顎には 3 対の髭が有り、上顎は鬚状に縁取られる。眼は仔魚期には大きい、着底後に退縮してやがて皮下に埋没気味となる。背鰭と臀鰭は基底が長く尾鰭と連続するものの、尾鰭との連続部で欠刻がある。腹鰭は大きく楕円形で頭長よりも長い、近似種に比べて躯幹部がやや短い。体色は灰色を帯びた暗赤色で、体軸に沿って不明瞭な明色小斑紋が縦列する。未成魚ではやや鮮やかである。生息環境の底質はシルト状の粒子の細かい軟泥であり、1 m 前後の範囲に深さ 30 cm 程度に及ぶ生息孔を掘る。多毛類や甲殻類などを捕食する。
生息・生育状況	生息地はおもに河口干潟やその延長上に存在する前浜干潟であり、底質は保水性のよいシルト状の粒子の細かい軟泥を好む。個体密度は生息地により異なるが、大規模な干潟では比較的見ることが可能で、同所的にキセルハゼ、エドハゼ、タビラクチなどハゼ類やヨコヤアナジャコが見られることもある。また、近年では豪雨災害の影響で土砂が河口域に流れ込み、干潟の性質が変性した生息地もあり、再確認ができなくなった場所もある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	埋め立て、護岸工事、水質汚濁、土砂の流入、底質の有機汚染などにより環境は悪化している。軟泥部以外の場所では確認できないことから、土砂流入等による底質変化の防止、底質を循環する水の確保、干潟に生息する無脊椎動物を含めた生息環境の保全などが重要である。また、このような環境が一定面積を確保しており、周辺地域にも類似環境が形成されることにより仔魚が加入しやすくなって遺伝的多様性が保たれる。
特記事項	日本でチワラスボとされていた種には少なくとも 4 種が混在していたことが明らかになり、広島県では上記特徴を示す本種が確認されている。近似種を含む本種群の産卵期は 6~9 月と考えられ、有明海や瀬戸内海の個体群では全長 16 mm 前後で浮遊生活を終えて着底生活を送るようになる。仔魚には集光性がある。
産地情報	呉市（呉）、竹原市、尾道市（尾道、因島）、福山市（福山）

Murdy EO, 2018. A redescription of the gobiid fish *Taenioides purpurascens* (Gobiidae: Amblyopinae) with comments on, and a key to, species in the genus. *Ichthyological Research* 65: 454-461.

吉郷英範 2015. 広島県の陸水性魚類. 比和自然科学博物館研究報告, 56: 91-181. 10 pls.

(吉郷英範)

**タバラクチ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②**

*Apocryptodon punctatus* Tomiyama, 1934

スズキ目 ハゼ科

環境省: VU

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: なし

概要	体長 7 cm になり、体は円筒状で、やや側扁する。眼は背面に位置し、上顎が下顎を覆い、上顎後端は眼の後縁を大きく越える。第 1 背鰭は 6 棘、第 2 背鰭は 1 棘 21~23 軟条、臀鰭は 1 棘 22~24 軟条、胸鰭は 17~24 軟条。生時の体色は淡灰色で、腹面は白い。体側中央に暗色の楕円形斑と縦帯が交互に並ぶ。背面に 7 暗色鞍状斑がある。眼の後方、頬や鰓蓋部に暗色縦帯がある。斑紋はいずれも黒褐色である。日本では西日本で散在的に分布する。仔魚は夏季に回帰し、河口付近で浮遊生活を行い、全長約 2 cm から河口の軟泥干潟の滞筋や浅い水たまりで底生生活を始める。生後約 2 年で成魚となって繁殖する。通常は繁殖後に死亡する。
生息・生育状況	生息地は河口干潟やその延長上にある前浜干潟であり、生息環境の底質は保水性のよいシルト状の粒子の細かい軟泥域である。このような場所の中でも甲殻類や多毛類などが数多く生息している種の多様性と生産力が高い、かつ有機汚濁を受けていない場所に見られる。因島の生息地では底質が変化して軟泥域が縮小し、近年確認できなくなった。
存在を脅かす要因・保全の留意点	埋め立て、護岸工事、水質汚濁、土砂の流入、底質の有機汚染などにより環境は悪化している。軟泥部以外の場所では確認できないことから、土砂流入等による底質変化の防止、底質を循環する水の確保、干潟に生息する無脊椎動物を含めた生息環境の保全などが重要である。また、このような環境が一定面積を確保しており、周辺地域にも類似環境が形成されることにより遺伝的多様性が保たれる。
特記事項	河口干潟や前浜干潟のシルト状の軟泥底に生息し、県内の生息地では軟泥域に生息するテッポウエビ類と同所的に生息していることが多く、これらテッポウエビ類の巣穴利用が示唆される。婚姻色は臀鰭と尾鰭の縁辺が黒色となる。県内での産卵期は婚姻色の発現時期や仔魚の出現状況から晩春から初夏と推定されているが、産卵は観察されていない。
産地情報	呉市（呉）、三原市（三原）、尾道市（尾道、因島）、福山市（福山）

吉郷英範 2018. 広島県から記録された海産魚類目録. 比和自然科学博物館研究報告, 59: 127-193. 5 pls.

Murase A, Inui R, Miki R, Miyazaki Y. 2017. Revising the distribution of a threatened goby, *Apocryptodon punctatus* (Perciformes, Oxudercidae), in Japan with the discovery of an isolated population. *Zookeys* 645: 71-83.

(吉郷英範)

**シラウオ 絶滅危惧 II 類(VU) VU-①**

*Salangichthys microdon* (Bleeker, 1860)

キュウリウオ目 キュウリウオ科

環境省: なし

広島県 2011: VU

広島県 2003: なし

概要	以前は旭川が南限とされていたが、現在は九州の主要河川の汽水域や汽水湖に分布している。本県では本郷川・芸南の小河川や黒瀬川・太田川から確認されており、聞き取り調査では大竹市の小河川や小瀬川でも四手網で採れるという。太田川の派川では 1992 年までシロウオ漁(ハゼ科のシロウオを漁獲する)が行われていたが、漁期に数尾採れる程度で、個体数はきわめて少ない。全長 70~80 mm、無色透明であるが、液浸標本にすると白色になる。シロウオ漁は芸南の島嶼部でも行われているが、本種の生息は聞かない。
生息・生育状況	生活史のほとんどを汽水域で生活し、繁殖期には汽水域上限まで遡上し、繁殖後に死滅する。河口域から汽水域で行われているシロウオ漁(四手網・定置網)で、シーズンに数尾が漁獲されるが、近年、遡上については不明である。本県では太田川で確認されたのが初めてで、県内の小河川から確認されているが、生息域が拡大しているのか、縮小しているのか不明である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	河口堰などができると絶滅は必至である。生息場所は内湾の沿岸域であることから、少なからず水質汚染も生息には影響していると考えられる。
特記事項	シロウオ漁の漁期にシロウオとともに採集されるため、シラウオ(キュウリウオ科)はシロウオ(ハゼ科)と区別されていない。ただし、漁師仲間ではシラウオは「岡山シロウオ」と区別されているようだ。シラウオの南限が岡山であった頃のなごりと推察される。シロウオは漁獲後に畜養し、市場に出荷されることがあるが、シラウオは直ぐ死滅し、個体数が少ないので、市場に出ることはない。
産地情報	広島市（中区）、呉市（安浦）、尾道市（尾道）、福山市（福山）、東広島市（安芸津）

内藤順一 1985. 京橋川(太田川水系)から採れたシラウオ. 比婆科学, 130: 5-8.

内藤順一 1994. 増補・改訂版 広島県の淡水魚. (比婆科学教育振興会編). p. 48-49. 中国新聞社, 広島.

(内藤順一)

## カジカ大卵型 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-①, VU-②

*Cottus pollux* Günther, 1873

カサゴ目 カジカ科

環境省: NT

広島県 2011: VU

広島県 2003: CR+EN

概要	北海道南部・本州・四国・九州の中部以北に分布する日本固有種である。早瀬の礫底に生息し、3~4月頃、淡黄色から淡茶色の卵塊(150~300粒)を礫の下面に産み付け、雄が保護する。卵径は3.4~3.7mmで、一夫多妻制である。全長約13cmで、背中に4~5個の黒色横帯があり、胸鱗は12~14軟条の河川陸封型である。一生、河川域で過ごす。ドンコと混同されるが、本種は触ると「ぬるっ」としており、ドンコは鱗で「ざらざら」している。備北では「ならせ」と呼ばれている。「ごっぼつ」はドンコ、「牛どんこ・牛ごっぼつ」はカマキリ(アユカケ)、「ごり・ごりんちょ」はカワヨシノボリ類に使い分けられていたようだ。
生息・生育状況	1950年代までは、河川の中流域から上流域に生息していたが、近年は、本流の上流域と支流に生息し、個体数の減少が顕著である。流れの速い早瀬の礫底をおもな生息場所に行っているため、水量の減少により、夏季水温が上昇し、中流域では棲めなくなったようだ。また、ダムは水量をコントロールして流すため、出水が少なくなり、礫間が目詰まりして浮石環境が少なくなり、個体数が減少したと考えられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	流量の減少により、夏季水温が上昇し、また、目詰まりを起し、個体数が少なくなった。小規模な氾濫は河床材の目詰まりを解消し、浮石環境を創り出すのに有効である。ダムによるフラッシュ放流も放流量や放流時期を有効に利用すべきと考える。
特記事項	体型はハゼ科に似ているが、胸鱗は分かれているので、吸盤状にならず、急流では遡上できない。取水堰ができると、魚道があっても遡上できないので、本種専用(流量・流速)の魚道が必要である。内藤・他(2014)は本種の胸鱗軟条数は12.7~13.6(n=68)であり、卵径は3.3~3.5mm、卵は黄色、カジカ中卵型は14.3(n=37)で、卵径は2.6~2.8mm、卵の色は淡茶色を報告している。
産地情報	広島市(安佐北区, 佐伯区), 三次市(三次, 君田, 布野, 作木), 庄原市(庄原, 西城, 東城, 口和, 高野, 比和), 大竹市, 廿日市市(佐伯, 吉和), 安芸高田市(美土里, 高宮, 甲田), 安芸太田町(加計, 筒賀, 戸河内), 北広島町(大朝, 千代田, 豊平)

内藤順一・田村龍弘・河野暁彦 2014. 北広島町の淡水魚類. 北広島町の自然. p. 501-547. 北広島町教育委員会, 北広島町.

内藤順一 2000. 広島県動物誌資料(6). 74. 高野町使原川(神之瀬川)でカジカの卵塊を採集. 比婆科学, 194: 23-28. 3 pls.

(内藤順一)

## カジカ中卵型 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-①

*Cottus* sp. ME

カサゴ目 カジカ科

環境省: EN

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	北海道南部・本州・四国・九州の中部以北に分布する日本固有種である。下流の平瀬の礫底に生息し、1~2月頃、瀬頭の礫の下面に産卵する。太田川産(n=37)の卵径は2.6~2.8mmで淡茶色であり、400~1000粒を産み付ける一夫多妻制で、雄は卵を保護する。全長約13cm、背中に4~5個の黒色横帯があり、胸鱗は14~16軟条、太田川産では平均14.3(n=37)である。両側回遊魚で、孵化仔魚は降海する。ドンコと混同されることが多いが、本種はほとんど鱗がないため、触ると「ぬるっ」としており、ドンコは鱗で覆われているため「ざらざら」している。
生息・生育状況	1950年代までは沿岸部の下流域に分布していたと考えられるが、市街地化や取水堰の構築により個体数を減少させた。太田川の高瀬堰より下流域には比較的多くの個体が生息しており、近年、周辺の小河川でも生息が確認されている。おそらく、降海した孵化仔魚が水質の改善した周辺の小河川に遡上していると考えられる。広島市内の市街地周辺に本種が生息することは、水質・河床材料などが本種にとって良好であるとされる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	流量の減少や出水が少なくなり、河床の礫間が目詰まりし、生息環境が悪化している。河川の平坦化・直線化も影響していると考えられる。両側回遊魚であるから、沿岸域の水質も孵化仔魚の生息には少なからず影響を及ぼしていると考えられるが、太田川本流から流下した孵化仔魚が周辺の小河川へ広がっているようだ。
特記事項	本種やテナガエビは可部(太田川)や布付近(太田川中流域)まで生息していたが、高瀬堰の構築により、遡上できなくなっていた。近年、高瀬堰の船通し水路を改築し、本種専用の魚道がつくられたことにより、高瀬堰より上流域でも生息が確認されるようになった。しかし、孵化仔魚が高瀬堰を降っていることは確認されていない。岡山では分化段階の異なる中卵型が知られている。
産地情報	広島市(中区, 東区, 南区, 西区, 安佐南区, 安佐北区, 安芸区, 佐伯区), 福山市(福山, 新市), 大竹市, 廿日市市(大野), 府中町, 海田町

内藤順一 2000. 広島県動物誌資料(6). 73. 太田川本流でカジカの卵塊を採集. 比婆科学, 194: 23-28. 3 pls.

内藤順一 1994. 増補・改訂版 広島県の淡水魚. (比婆科学教育振興会編). p. 138-139. 中国新聞社, 広島.

(内藤順一)

**オヤニラミ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-①, VU-②, VU-③**

*Coreoperca kawamebari* (Temminck & Schlegel, 1843)

スズキ目 ケツギョ科

環境省: EN

広島県 2011: VU

広島県 2003: VU

概要	本種は淀川・由良川以西の本州、四国の香川県・徳島県、九州北部に分布する。広島県ではほとんどの水系に分布し、清澈な河川の上中流域に多い。海産のメバル類に似た形態が特徴で、種小名の <i>kawamebari</i> もそれに由来する。鰓蓋後端に大きな目状紋がある。特徴的な形態と愛嬌のある行動から各地で親しまれて地方名が多く、県内では「とうさぶろう、とうみら、やねみら、おさかけ、おさっかち、よつめ」などの呼び名がある。繁殖期は4~9月で、産卵ピークは5~6月である。動物食が強く、水生昆虫などをおもに食べる。1年で全長5~7cmに成長し成熟する。ケツギョ科で日本に生息するのは本種のみであり、学術上貴重な種である。
生息・生育状況	河川改修が盛んに行われ水質悪化も顕著であった1990年代前半ごろまでは、各地で個体数が激減した。近年は全般的な水質の向上と大規模な河川改修の終息により個体数が回復傾向にあるが、沼田川上流や芦田川中流では分布が局所的で個体数もきわめて少ない状況が続いている。黒瀬川水系では近年確認されなくなり、絶滅した可能性がある。なお、呉市二河川、廿日市市永慶寺川、大竹市新町川の各水系の個体群は移入と考えられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	河川改修等にもなう緩流部や水生植物帯の消失・縮小、生活排水等の流入による水質汚濁、河川工事や周辺開発にもなう長期間の濁水の流入等が存在を脅かす要因と考えられる。また、本種は観賞魚として人気があるため、商品として大量に捕獲される場合があり、減少の一因と考えられる。保全には、良好な水質、石や岸辺の間隙、水生植物等の隠れ場所の多い緩流部、産卵場所や稚魚の成育場所となる抽水植物帯の確保に留意する必要がある。
特記事項	繁殖期の雄はヨシの茎などの産卵基質を中心になわばりを築き、非常に攻撃的になる。卵が成熟した雌は雄のなわばりにはいり、腹部や腹鰭を押し付けて産卵基質に産卵する。産卵後、雌は追い払われ、雄が卵や孵化仔魚を守る。ムギツクが共存する河川では、ムギツクの集団が本種のなわばりに侵入し、本種の卵の周りに産卵する托卵行動が知られている。沼田川上流部では地元の有志による保護活動が行われている。
産地情報	広島市(東区, 安佐南区, 安佐北区, 佐伯区), 呉市(呉), 三原市(久井), 福山市(福山), 府中市(府中, 上下), 三次市(三次, 君田, 作木, 吉舎, 三良坂), 庄原市(庄原, 総領), 大竹市, 東広島市(西条, 志和, 黒瀬, 福富), 廿日市市(大野), 安芸高田市(吉田, 八千代, 美土里, 高宮, 甲田, 向原), 安芸太田町(加計, 筒賀, 戸河内), 北広島町(大朝, 千代田, 豊平), 世羅町(甲山)

吉郷英範 2015. 広島県の陸水産魚類. 比和科学博物館研究報告, 56: 91-181. 10 pls.

内藤順一 2013. 広島県動物誌資料(34). 比婆科学, 246: 1-6.

(中西 毅)

**エドハゼ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-②**

*Gymnogobius macrognathos* (Bleeker, 1860)

スズキ目 ハゼ科

環境省: EN

広島県 2011: VU

広島県 2003: なし

概要	体長5cm程度になり、体はやや細長く、頭は縦扁、体後部は側扁する。上顎後端は眼の後縁を大きく越える。第2背鰭の軟条は10~12本、臀鰭軟条は9~11本、胸鰭軟条は20本。雌では第1背鰭の第5棘が伸長する。生時の体色は緑味を帯びた褐色で、腹部はやや白い。体背面には複雑な模様があり、体側には青味のある褐色横斑がある。尾鰭には5~6本の横縞模様があるものの下葉部には達しない。婚姻色を発した雌では第1背鰭の後端に1暗色斑が発現し、腹鰭や臀鰭の縁辺部が黒くなる。日本では東北から九州にかけての太平洋、九州の東シナ海沿岸、瀬戸内海、有明海奥部に分布する。アナジャコ類の生息孔を隠れ家や繁殖場として利用している。
生息・生育状況	泥質干潟が広がる松永湾奥部の河口干潟では比較的広く生息域が連なっており、個体数も多い。芦田川では比較的少数ながら散見される。いずれも軟泥底に生息し、干潟内の底質状況に合わせて消長も変化し、生息範囲も変化している。
存在を脅かす要因・保全の留意点	埋め立て、護岸工事、水質汚濁、土砂の流入、底質の有機汚染等により環境は悪化している。軟泥部以外の場所では確認できないことから、土砂流入等による底質変化の防止、底質を循環する水の確保、他の生物を含めた生息環境保全等が重要である。また、このような環境が一定規模で維持されており、周辺地域にも類似環境が形成される事により多様性が保たれる。干出する浅所で泥質を好むことから、生息地への有機汚染の影響を受けやすい。
特記事項	干潟に生息するウキゴリ属ハゼ類の中でもっとも軟泥環境を好んで生息している。山口県や岡山県など近隣地域でも広大な泥質干潟に出現する傾向がある。産卵期は県外では3~5月頃とされる。卵はアナジャコ類等の生息孔を利用し、浮遊期の仔魚は浅海で生活すると考えられている。
産地情報	尾道市(尾道), 福山市(福山)

吉郷英範 2015. 広島県の陸水性魚類. 比和自然科学博物館研究報告, 56: 91-181. 10 pls.

Inui R., Koyama A., Akamatsu Y. 2018. Abiotic and biotic factors influence the habitat use of four *Gymnogobius* (Gobiidae) species in riverine estuaries in the Seto Inland Sea. Ichthyological Research, 65: 1-11.

(吉郷英範)

**チクゼンハゼ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-②**

*Gymnogobius uchidai* (Takagi, 1957)

スズキ目 ハゼ科

環境省: VU

広島県 2011: VU

広島県 2003: なし

概要	体長 4 cm 程度, 体はやや細長くて体前部が円筒形で, 体後部は側扁する。上顎後端は眼の後縁を越える。下顎下面には肉質突起があり, このうちの 1 対は髭状である。第 2 背鰭の軟条は 10~11 本, 臀鰭軟条は 9~11 本, 胸鰭軟条は 18~20 本。生時の体色は青味を帯びた褐色で, 腹部は白い。2 個で対をなす縦長な長方形の斑紋が体軸に沿って縦列し, その間に白色斑がある。尾鰭には 5~6 本の横縞模様があるもの下葉部には達しない。北海道から九州にかけての太平洋, 近畿から九州にかけての日本海・東シナ海岸, 瀬戸内海に面した地域に分布する。干潮時にはアナジャコ類等の生息孔に潜む。産卵期は冬から初夏の間と考えられる。
生息・生育状況	賀茂川, 沼田川, 藤井川の砂質に富んだ河口干潟で確認されている。同地域では類似した生息環境が広く見られるが, このなかで特定の範囲でしか確認されていない。ただし, 生息環境に変化がない既知産地では継続して観察されている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	埋め立て, 護岸工事, 水質汚濁, 土砂の流入, 底質の有機汚染等により環境は悪化している。軟泥部以外の場所では確認できないことから, 土砂流入等による底質変化の防止, 底質を循環する水の確保, 他の生物を含めた生息環境の保全が重要である。このような環境が一定規模で維持されており, 周辺地域にも類似環境が形成される事により多様性が保たれる。干出する浅所で砂泥質を好む事から, 生息地への有機汚染の影響を受けやすい。
特記事項	砂域の河口干潟を好む。スナモグリ類やアナジャコ類(多くはヨコヤアナジャコ)等が同所的に多くみられる。産卵はアナジャコ類等の生息孔で行われる。仔魚は孵化後に海域で遊泳生活をし, 体長 10 mm から干潮に着底をはじめめる。
産地情報	竹原市, 三原市(三原), 尾道市(尾道), 福山市(福山)

Inui R., Koyama A., Akamatsu Y. 2018. Abiotic and biotic factors influence the habitat use of four *Gymnogobius* (Gobiidae) species in riverine estuaries in the Seto Inland Sea. *Ichthyological Research*, 65: 1-11.

吉郷英範 2015. 広島県の陸水性魚類. 比和自然科学博物館研究報告, 56: 91-181. 10 pls.

(吉郷英範)

**ルリヨシノボリ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-①, VU-②**

*Rhinogobius mizunoi* Suzuki, Shibukawa & Aizawa, 2017

スズキ目 ハゼ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概要	河川の下流域に生息するヨシノボリ類の一種で, 孵化仔魚は内湾に流下する両側回遊魚である。全長 6~8 cm, 頬部にルリ色の小斑点があるのが特徴である。体側の横斑はやや不明瞭であるが, 鱗がルリ色になることが本種の和名の由縁であり, 尾鰭・背鰭・臀鰭などの垂直鰭の外縁が縁どられるのも特徴である。近年, 熊野町のため池には河川陸封型のルリヨシノボリが報告された。おそらく, 熊野町が市街地化したために, 二河川との連続性がなくなり, ため池などに陸封されたと推測される。全長 3~4 cm で, 矮小型である。
生息・生育状況	外洋水が流入する広島湾や島嶼部の小河川, 芸予地域の小河川に分布し, 下流や河口近くの礫底に生息する。小瀬川では弥栄ダムの構築により生息地が消滅し, 二河川でも確認できなくなった。遡上距離は河口から約 5 km 程度と考えられるが, 流量のある滞筋を好む。比較的個体数が多かった大屋川(呉市天応)や小屋浦川(坂町)は 2018 年の西日本豪雨により, 河川が崩壊し, その後, 生息は確認されていない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	近年の集中豪雨による河川の崩壊により, 壊滅状態の河川が増加した。両側回遊魚であるから, 治水工事に配慮が必要であり, 河口堰などの構築は影響は大きいと考えられる。治水工事の完了後にはフォローアップ調査が必要である。
特記事項	太田川のような大きい河川からは確認されず, 漁業権のない中・小河川に生息していることが多い。琵琶湖産稚アユの放流に紛れて移入されたトウヨシノボリの増加に影響され, 個体数が減少しているのではないかと考えられる。また, カワヨシノボリが下流域まで生息し, 個体数が増加していることも本種の生息に影響していると考えられる。
産地情報	呉市(呉), 大竹市, 廿日市市(宮島), 熊野町, 坂町

内藤順一 1996. 熊野町の淡水魚類. 安芸熊野の自然誌. p. 234-265. 熊野町教育委員会, 広島.

内藤順一 1994. 増補・改訂版 広島県の淡水魚. (比婆科学教育振興会編). p. 138-139. 中国新聞社, 広島.

(内藤順一)

シロチチブ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-①, VU-②

*Tridentiger nudicervicus* Tomiyama, 1934

スズキ目 ハゼ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長は5 cm程度になり、体は円筒形で背鰭前方領域にはほとんど鱗がない。第1背鰭の縁辺は丸い。第1背鰭は6棘、第2背鰭は1棘9~11軟条、臀鰭は1棘8~10軟条、胸鰭は18~21軟条。体は淡褐色で、暗色縦斑が縦列し、尾柄部で2斑紋となる。眼の下と後方に暗色斜帯がある。芦田川では河口干潟やアマモ場沿岸域の泥底部で記録されており、干潟内では潮干狩り跡の掘削部位で見つかっている。多毛類や甲殻類を捕食し、デトリタスも食べる。春から夏ごろに貝殻の裏に産卵し、雄が保護する。日本の有明海と瀬戸内海からのみ報告されており、県下では芦田川・松永湾・横島などから記録されている。
生息・生育状況	県下では備後地域の泥質干潟内にある凹地やアマモ場から見つかっているものの本来の生息環境であるかは不明である。生息域周辺の改変や構造物の構築などの人為的改変が直接的・間接的に生息環境に影響を及ぼす懸念がある。また、瀬戸内海域の個体群はこの地域に固有の集団と考えられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	本種は軟泥底の干潟に生息しているが、その中でも生息環境の志向に一定の傾向が見られる。埋立や護岸整備などの人為的な改変などの攪乱により、生息環境の減少や劣化が懸念される。本種の生息域を直接改変することがなくても、その周辺で構造物が構築されると海流の流れに変化が起こって、底質の改変が起こって生息に不適となる可能性もある。
特記事項	有明海と瀬戸内海では互いの個体群間では交流がないと思われ、生息環境に相違がある可能性もある。瀬戸内海周辺地域では、山口県・岡山県・香川県、福岡県などから記録されている。備讃瀬戸ではおもに冬季に底引き網で混獲されており、ライフサイクルの中で垂直移動を行っている可能性がある。
産地情報	福山市(福山, 内海)

Inui R., Takemura S., Koyama A. and Onikura N. 2014. Potential distribution of *Tridentiger barbatus* (Günther 1861) and *Tridentiger nudicervicus* (Tomiyama 1934) in the Seto Inland Sea, western Japan. *Ichthyological Research*, 61: 83-89.

吉郷英範 2015. 広島県の陸水性魚類. 比和自然科学博物館研究報告, 56: 91-181. 10 pls.

(吉郷英範)

イカナゴ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-①, VU-②

*Ammodytes personatus* Girard, 1856

スズキ目 イカナゴ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	北海道沿岸から瀬戸内海に分布する。水深10~30 mの内湾底砂に群れで生息する。水温15℃を超えると夏眠し、早春に産卵する。中大型魚の餌生物として重要な位置を占める。瀬戸内海西部水域は、過去にイカナゴの主要な漁場であったが、近年水揚げ量が大幅に減少した。1960年代から1990年代まで実施された海砂利採取による生息環境の劣化が減少の一因とされている。分類学的再検討により、瀬戸内海に生息するイカナゴの学名は <i>Ammodytes japonicus</i> Duncker & Mohr, 1939 に変更されている (Orr et al. 2015)。
生息・生育状況	県内のイカナゴ漁獲量は2008年以後急激に落ち込み(年間2~3トン)、現在は県東部水域でわずかに漁業が実施されているのみである。海砂利採取の実施された三原瀬戸水域では、1980年以降イカナゴは漁獲されていない。広島県による三原瀬戸水域における生息状況調査でも、1998年以降は減少傾向にある。2015年の調査においてもさらなる生息状況の悪化が確認されている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	今後の推移を細心の注意をもって見守る必要がある。
特記事項	—
産地情報	呉市(倉橋, 下蒲刈, 蒲刈, 豊浜, 豊), 竹原市, 三原市(三原), 尾道市(因島, 瀬戸田), 福山市(内海)

反田 實 2012. イカナゴの漁獲動向と瀬戸内海の家砂採取. 日本沿岸域における漁業資源の動向と漁業管理体制の実態調査. 平成23年度事業報告, p. 79-94.

坂井陽一・遠藤 梓・岩崎菜美・富山 毅・柴田淳也・山口修平・中口和光 2018. 瀬戸内海三原瀬戸におけるイカナゴの夏眠底質環境. 広島大学総合博物館研究報告, 10: 19-27.

(坂井陽一)

**アブラボテ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Tanakia limbata* (Temminck & Schlegel, 1846)

コイ目 コイ科

環境省: NT

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	濃尾平野以西の本州、四国の瀬戸内側、九州北部に分布する。全長4~6cm、雄は吻端に白い追星があり、雌は繁殖期に灰色の産卵管を伸長させる。雌雄ともに一對の口髭を持ち、体色はフナ色であるが、繁殖期の雄は濃紺色から黒褐色の婚姻色を発現させる。繁殖期は5~7月、淡水二枚貝のカタハガイ・マツカサガイ・ニセマツカサガイ・カワシンジュガイなどの鰓葉内に産卵する。近似種のヤリタナゴとは婚姻色や産卵管の色彩で区別される。本流では緩流部の泥底や砂泥底に生息するが、淡水二枚貝の減少にともなう、本種も減少している。
生息・生育状況	小瀬川や庄原市道後ではカワシンジュガイの絶滅により本種も絶滅した。また、黒瀬川では絶滅寸前である。太田川下流域ではカタハガイが、上流域ではカワシンジュガイが利用され、可愛川・馬洗川・西城川ではカタハガイ・マツカサガイ・ニセマツカサガイが、沼田川水系や芦田川水系ではマツカサガイ・ニセマツカサガイ・イシガイ・オバエボシガイが、帝釈川ではカワシンジュガイが利用されているが、ササノハガイやヌマガイ(旧名ドブガイ)は利用されない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生きた淡水二枚貝に産卵する習性から、淡水二枚貝の減少が本種の減少につながる。河川改修や圃場整備事業により用水路がコンクリート化されると、二枚貝が棲めなくなる。用水路には一定の間隔で砂泥スペースを取り入れると、二枚貝の生息に有効である。
特記事項	本種は生きた淡水二枚貝に産卵する習性から、淡水二枚貝の減少が本種の減少につながる。淡水二枚貝の幼生(グロキジュウム)は淡水魚の鰓や鰭に寄生し、成長して、変態後に河床に落ちて底生生活をする事が知られている。タナゴ類と淡水二枚貝はセットで保護しなければ、やがて、タナゴ類は絶滅してしまう。アブラボテとカワシンジュガイの組み合わせは、芸北・帝釈・蒜山(岡山県)の3か所のみである。
産地情報	広島市(東区、安佐南区、安佐北区)、呉市(呉)、三原市(三原、大和、本郷)、福山市(福山、新市)、府中市(府中)、三次市(三次、甲奴、君田、布野、作木、吉舎、三良坂、三和)、庄原市(庄原、総領、西城、東城、口和)、東広島市(西条、八本松、志和、高屋、黒瀬、福富、豊栄、河内)、廿日市市(吉和)、安芸高田市(吉田、八千代、美土里、高宮、甲田、向原)、安芸太田町(加計)、北広島町(芸北、千代田)、世羅町(世羅、甲山、世羅西)

内藤順一・田村龍弘・河野曉彦 2014. 北広島町の淡水魚類. 北広島町の自然, 501-520. 22 pls. 資料 6. 北広島町教育委員会, 広島.

内藤順一 1994. 増補・改訂版 広島県の淡水魚.(比婆科学教育振興会編). p. 138-139. 中国新聞社, 広島.

(内藤順一)

**チュウガタスジシマドジョウ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Cobitis striata striata* Ikeda, 1936

コイ目 ドジョウ科

環境省: VU

広島県 2011: NT

広島県 2003: VU

概要	本亜種は本州、四国、九州の瀬戸内側および広島県・島根県の一部の日本海流入河川に分布する。広島県内では比較的規模の大きい河川の流域に広く分布し、中下流域とその周辺の用水路の粒径が細かな砂底に生息する。体は細長く全長は雄 7.5 cm、雌 9.5 cm 程度で、口ひげは6本。尾鰭基部の背側の斑紋は明瞭で、尾鰭には2~3列の弧状の横帯がある。繁殖期は5~7月で、河川の氾濫原や水田の排水が流れる小溝などの一次的水域に遡上して産卵する。成熟には雄は1~2年、雌は2年以上かかる。産卵場所は脱出しやすい溝なので、産卵後の親魚の死亡率は低く、一生のうちに2~3回産卵すると考えられている。
生息・生育状況	比較的澄澄な水質で局所的に存在する粒径の細かな砂底に生息する。このような場所は河川改修等による河床環境の単調化や流況変化によって消失しやすいため、河川改修が盛んに行われた1990年代前半ごろまでは個体数がかかり減少した。近年は全般的な水質の向上と大規模な河川改修の終息によって個体数が回復傾向にある河川が多いが、黒瀬川では個体数が激減した状態のままである。
存在を脅かす要因・保全の留意点	河川改修等によるワンドや細砂底の消失・縮小、護岸や農地整備等による河川本流から水田周辺の小溝までの連続性の分断、生活排水の流入増による水質汚濁や底質環境の悪化等が存在を脅かす要因と考えられる。河川本流の良好な水質、細砂からなる底質、河道内の氾濫原や水域の連続性がセットで揃うことが生息条件で、河川改修等に際しては、ワンドや中洲の保全による砂底環境の確保や河川と用水路の連続性への留意が必要である。
特記事項	本亜種は、チュウガタスジシマドジョウ、オングラスジシマドジョウ、ハカタスジシマドジョウの3亜種に区分されるナミスジシマドジョウの基亜種である。
産地情報	広島市(安佐南区、安佐北区、佐伯区)、呉市(呉)、三原市(三原、大和、本郷)、福山市(福山、新市)、府中市(府中)、三次市(三次、三良坂)、庄原市(庄原、総領)、大竹市、東広島市(西条、黒瀬)、廿日市市(佐伯)、安芸高田市(吉田、甲田、向原)、世羅町(甲山)

中島 淳 2017. チュウガタスジシマドジョウ. 日本のドジョウ(中島 淳・内山りゅう, 編), p. 120-123. 山と溪谷社, 東京.

吉郷英範 2015. 広島県の陸水産魚類. 比和科学博物館研究報告, 56: 91-181.

(中西 毅)

**アカザ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Liobagrus reini* Hilgendorf, 1878

ナマズ目 アカザ科

環境省: VU

広島県 2011: NT

広島県 2003: CR+EN

概要	日本固有種で、秋田県・宮城県以南の本州、四国、九州に分布。広島県では島嶼部を除くほとんどの河川に分布し、上流域下部から中流域の清澄な早瀬や平瀬のこぶし大～頭大の石が重なった浮き石河床に生息する。全長は 10 cm 前後で体色は赤褐色。4 対の口ひげがあり、頭部は縦扁、体後部は側扁する。繁殖期の雄は、後頭部付近の筋肉が盛り上がる。背びれと胸びれに棘があり、手に刺さるとかなり痛いことから「てんきり」の呼び名がある。繁殖期は 5～6 月で、瀬の石の下に卵塊を産み付け、雄が保護する。従来、国内に 1 属 1 種とされてきたが、近年の研究では遺伝的に異なる 2 つの種群に分かれ、広島県には両種群が生息するとされている。
生息・生育状況	県内の河川上流域～中流域に広く生息していたが、1970 年代以降、河川改修や取水堰等の設置、水質悪化等によって瀬の浮き石環境が消失・変質し、その影響がとくに大きかった中流域で個体数が激減した。近年は大規模な河川改修の終息や下水整備による水質向上、フラッシュ放流等による適度な河床攪乱によって水質・底質環境が好転し、本種が全般に回復傾向だが、瀬野川・黒瀬川・沼田川の各水系では依然として回復が低調である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	改修による河川形態の単調化および取水堰等の設置による湛水部の拡大や水量の減少は生息に適した瀬の消失・縮小を招くため、整備に際しては河川形態の多様化に配慮する必要がある。また、長期にわたる濁水の流入や水質汚濁による砂泥や有機物の増加は礫間の埋没や変質の要因となるため留意が必要で、これらの堆積物を掃流するフラッシュ放流や小規模な出水は浮き石河床の持続に有効と考えられる。
特記事項	本種は近年の遺伝的な研究で異なる 2 つの種群 (C1, C2) に分けられるとされ、形態的には C1 は体側に脱色斑があり尾びれ縁取りが薄く、C2 は体側に脱色斑がなく尾びれの縁取りが濃いなどの違いが示されている。両種群の県内での詳細は分布状況は不明だが、内藤、吉郷、中西 (いずれも未発表) が形態をもとに県内産を区分した結果、太田川・江の川・芦田川の各水系で両種群が確認され、C2 は他の水系でも広く確認された。
産地情報	広島市 (西区, 安佐南区, 安佐北区, 安芸区, 佐伯区), 呉市 (呉), 竹原市, 尾道市 (尾道, 御調), 福山市 (福山, 新市), 府中市 (府中, 上下), 三次市 (君田, 三良坂, 三和), 庄原市 (庄原, 西城, 東城, 口和, 高野, 比和), 大竹市, 東広島市 (西条, 八本松, 志和, 黒瀬, 福富, 豊栄, 河内, 安芸津), 廿日市市 (大野, 佐伯, 吉和), 安芸高田市 (八千代, 美土里, 高宮, 甲田, 向原), 熊野町, 安芸太田町 (加計, 筒賀, 戸河内), 北広島町 (大朝, 千代田, 豊平), 世羅町 (甲山, 世羅西), 神石高原町 (油木, 神石, 豊松)

Nakagawa H., Seki S., Ishikawa T., and Watanabe K. 2016. Genetic population structure of the Japanese torrent catfish *Liobagrus reini* (Amblycipitidae) inferred from mitochondrial cytochrome b variations. *Ichthyological Research*, 63: 333–346.

吉郷英範 2015. 広島県の陸水産魚類. 比和科学博物館研究報告, 56: 91–181.

(中西 毅)

**ミナミメダカ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b, NT-c**

*Oryzias latipes* (Temminck & Schlegel, 1846)

ダツ目 メダカ科

環境省: VU

広島県 2011: NT

広島県 2003: CR+EN

概要	太平洋側は岩手県南部以南、四国、九州、南西諸島、日本海側は京都府から山口県まで分布し、河川の緩流部や止水環境、池沼、汽水域に生息する日本固有種である。全長 3～4 cm、頭部は扁平で口は小さく、斜め上向きで、雌雄は臀鰭の形で区別される。背鰭は 6 軟条、臀鰭は 15～22 軟条で、別種のキタノメダカとは体側鱗に黒い縁取りがなく、染みのような斑点がないことで区別される。近年、遺伝的な差異から、本種は 9 つの地方型に分類された。本県の個体群はミナミメダカ西瀬戸内型と考えられる。
生息・生育状況	教科書の教材に使われるほど個体数は多かったが、圃場整備事業や水田管理の画一的な方法や河川改修などにより、おもな生息環境を失い、個体数を減少させていったと考えられる。しかし、近年、市街地周辺以外は徐々に回復傾向にあるように思う。県内では標高約 500 m 以下に生息している。一方、本種と近似した形態と生活史をしている国外移入種(外来種)のカダヤシが市街地の水路などで増え、ニッチが同じ本種を追いやっている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	鑑賞用のメダカ(突然変異個体)が珍重され、販売により、野外で遺伝子汚染が危惧される。また、市街地周辺ではニッチが同じカダヤシ(特定外来種)が増え、本種の生存を脅かしている。池沼では特定外来種のオオクチバスやブルーギルに捕食されており、子どもたちに外来種に対する啓発活動が必要である。特定外来種の移動・放流が違法行為であることをメディアなどによって広報活動する必要がある。
特記事項	島嶼部の汽水域では在来個体群が残っているので、湾岸域の工事では配慮が必要である。廿日市市極楽寺山(標高 600 m)の蛇の池には本種が生息しているが、これらは、水鳥によって粘着卵が運ばれたと考えられる(近年は人為的放流の可能性もある)。今後、このようなことは周辺のため池でもおこることであるが、オオクチバスやブルーギルなどの外来種が定着すれば、本種の生息域は縮小すると考えられる。
産地情報	広島市 (東区, 南区, 西区, 安佐南区, 安佐北区, 安芸区, 佐伯区), 呉市 (呉, 音戸, 倉橋, 下蒲刈, 蒲刈, 安浦, 川尻), 三原市 (三原, 大和, 本郷, 久井), 尾道市 (因島, 瀬戸田, 御調, 向島), 福山市 (福山, 沼隈, 神辺, 新市), 府中市 (府中, 上下), 三次市 (三次, 甲奴, 君田, 布野, 作木, 吉舎, 三良坂, 三和), 庄原市 (庄原, 総領, 口和, 高野, 比和), 東広島市 (西条, 八本松, 志和, 高屋, 黒瀬, 福富, 豊栄, 河内, 安芸津), 廿日市市 (廿日市, 大野, 佐伯, 宮島), 安芸高田市 (吉田, 八千代, 美土里, 高宮, 甲田, 向原), 江田島市

内藤順一 1998. 蒲刈町の魚類. 蒲刈町誌自然編, p. 191–232. 蒲刈町, 呉.

内藤順一 2000. 広島県動物誌資料(6). 比婆科学, 194: 23–28. 4 pls.

(内藤順一)

**クルマサヨリ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Hyporhamphus intermedius* (Cantor, 1842)

ダツ目 サヨリ科

環境省: NT

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概要	本種は青森県以南の本州と九州に分布し、おもに河川下流の汽水域から淡水域にかけての範囲や潟湖などに生息する。広島県では、太田川、賀茂川、沼田川の下流域や竹原港内で生息が確認されている。全長10~20 cmで近縁のサヨリよりも小型。また、下顎がサヨリよりも長く、下顎先端の下面がサヨリは朱色だが本種は黒色である。おもに表層で浮遊性の動植物を食べ、小型個体は付着動物も食べる。繁殖期は4~6月で、水草の小枝やアマモなどに卵を卵糸で絡みつかせるように産み付ける。
生息・生育状況	県内の各生息地ではいずれも個体数が少なく、確認されることはまれな状態となっている。全国的にも減少傾向にあり、かつて多産した宍道湖や中海でも個体数が激減している。潮止め堰設置による汽水域の縮小や護岸整備、埋立等によるアマモ場や抽水植物帯の減少によって繁殖場所や生育場所が消失・縮小したことが個体数の減少要因となっていると考えられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	潮止め堰の設置による汽水域の縮小や生息域の分断、護岸整備・中洲の浚渫・埋立等による水生植物帯の消失・縮小が存在を脅かす要因になっていると考えられる。護岸整備や中洲の改変に際しては、産卵場所や稚魚の成育場所となるアマモ場やヨシ等の抽水植物帯の保全への留意が必要である。
特記事項	本種と形態が似ているサヨリが河川下流の淡水域まで遡上することがあるので、慎重な種の判別が望まれる。
産地情報	広島市、竹原市、三原市（三原）

吉郷英範 2015. 広島県の陸水産魚類. 比和科学博物館研究報告, 56: 91-181.

比婆科学教育振興会 1990. 広島県の淡水魚. 230 pp. 中国新聞社, 広島.

(中西 毅)

**クボハゼ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Gymnogobius scrobiculatus* (Takagi, 1957)

スズキ目 ハゼ科

環境省: EN

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概要	体長4 cm程度で、頭はかなり縦扁、体前部は円筒形、体後部は側扁し、体はやや細長い。上顎後端は眼の後縁を大きく越え、上顎先端は突出する。第2背鰭の軟条は10~11本、臀鰭軟条は9~10本。生時の体色は褐色で、腹部はやや黄色い。腹部を除いて暗色斑が密在する。腹部側面には数本の横帯、尾鰭に横縞がある。婚姻色を発色した雌では、頭部腹面、背鰭、臀鰭、腹鰭が黒色となる。中部地方から九州にかけての太平洋、北陸から九州にかけての日本海・東シナ海、瀬戸内海に面した地域に分布する。生後約1年で繁殖活動を行う。県内の産卵期は婚姻色の発現状況から4~5月と考えられる。
生息・生育状況	県内の生息地は芸南地域の比較的外海に開けた河川に多く、生息環境は干潮時に瀬状になるような潮間帯中部付近の還元層のない砂礫質の範囲である。アナジャコ類の生息孔を生息・産卵場として利用しており、このような環境が維持されている既知生息地では生息状況にあまり変化が見られない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	埋め立て、護岸工事、水質汚濁、土砂の流入、底質の有機汚染等により環境は悪化している。軟泥部の場所では確認できない事から、土砂流入等による底質変化の防止、底質を循環する水の確保、他の生物を含めた生息環境保全等が重要である。また、このような環境が一定規模で維持され、周辺地域にも類似環境が形成される事によって仔魚の回帰が可能となって多様性が保たれる。
特記事項	砂礫質の河口干潟を好む。スナモグリ類やアナジャコ類（多くはヨコヤアナジャコ）等が同所的に多くみられる。産卵はアナジャコ類等の生息孔で行われる。仔魚は体長1 cmから干潮に着底をはじめめる。
産地情報	呉市（呉、倉橋、安浦）、竹原市、三原市（三原）、尾道市（尾道）、福山市（福山）、東広島市（安芸津）、江田島市（能美）

吉郷英範 2015. 広島県の陸水性魚類. 比和自然科学博物館研究報告, 56: 91-181. 10 pls.

Inui R., Koyama A., Akamatsu Y. 2018. Abiotic and biotic factors influence the habitat use of four *Gymnogobius* (Gobiidae) species in riverine estuaries in the Seto Inland Sea. *Ichthyological Research*, 65: 1-11.

(吉郷英範)

**ウキゴリ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Gymnogobius urotaenia* (Hilgendorf, 1879)

スズキ目 ハゼ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	全国の河川に分布し、サハリン、朝鮮半島にも分布している。近似種にシマウキゴリ、スミウキゴリがいるが、本種は第一背鰭後端部に黒色斑紋が顕著であり、胸鰭基底の模様が円形である。一方、スミウキゴリは第一背鰭後端部の黒色斑紋がないことで区別される。全長は8~15 cmで、汽水域から中流域までの緩流部に生息し、石や板などの下面に産卵し、雄が保護する。孵化仔魚は内湾に流下し、7~8月頃に遡上する。
生息・生育状況	河川では下流域の流れが緩い砂礫底や水際の植物下部に生息している。とくに、芸南地域の小河川や島嶼部の河口域から汽水域上限ではよく見られる。大きい河川では見つかりにくい、生息密度が低いのか、個体数が少ないのか、わからない。個体数が減少した小河川もあれば、府中大川や温品川などでは初めて遡上が確認された河川もある(内藤 2012)。おそらく、下水道整備により水質が改善され、生息が可能になったと推察される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	両側回遊魚であるから、内湾環境から河川域への遡上通路の確保が不十分であったり、潮止堰(河口堰)が構築されると遡上が阻害される。近年、頻発している集中豪雨により下流域で浚渫が行われているが、こうした工事は一時的に生息環境を壊すが、数年後には砂礫環境になり、生息環境は復活すると考えられる。
特記事項	三次市君田(神之瀬川)、神石高原町油木(小田川)でも確認されている。これらのポイントは河口から60~160 kmの位置にあることから、おそらく、琵琶湖産稚アユの放流に紛れて移入されたと考えられる。一方、芸南地域の小河川に広く分布していたスミウキゴリ <i>Gymnogobius petschiliensis</i> (Rendahl, 1924)は、各河川において、生息情報が増加したので準絶滅危惧(NT)から選外とした。
産地情報	広島市(東区、西区、安佐南区、安佐北区、佐伯区)、呉市(呉、音戸、倉橋、安浦)、三原市(三原)、尾道市(尾道)、福山市(福山、新市)、三次市(君田)、大竹市、東広島市(安芸津)、廿日市市(廿日市、大野)、江田島市(江田島)、府中町、海田町、神石高原町(油木)

内藤順一 2012. 広島県動物誌資料(30). 比婆科学, 242: 13-20. 5 pls.

内藤順一 1994. 増補・改訂版 広島県の淡水魚.(比婆科学教育振興会編). p. 150-151. 中国新聞社, 広島.

(内藤順一)

**トビハゼ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Periophthalmus modestus* Cantor, 1842

スズキ目 ハゼ科

環境省: NT

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概要	体長80 mmに達する。体はやや細長く、眼は頭部の背面に突出しているが眼を引っ込めることができる。日本では東京湾以西の南日本と琉球列島の沖縄島に生息する。瀬戸内海にも広く分布しているが生息環境の消失によって現存する生息地は点在化している。広島県では河口に発達する泥干潟に生息。干潟上の泥表面や水面を這ったり跳ねたりして移動する。干潮時には底生生物などの動物を捕食する。繁殖期は5~8月で雄がJ字状の巣穴を掘り、その周辺を縄張りとする。卵は産卵巣の中の空気中で生育し、雄親が保護を行う。親が空気を口に含み巣内に供給する。仔魚は全長約15 mmで干潟へ上陸する。冬期には越冬用の巣穴にこもる。
生息・生育状況	蒲刈島(江戸時代)、曾井(竹原市)、賀茂川(竹原市)、野呂川・日の浦川(呉市(安浦))、沼田川(三原市)、藤井川・本郷川・羽原川(尾道市)、福山市(福山)、山南川(福山市(沼隈))、芦田川(福山市(福山))。松永湾の干潟や芦田川河口域の県東部では多いものの、県西部では見られない。賀茂川の個体群は河川改修後に繁殖に適した干潟環境をほとんど失っており、県央部の河川河口域では成魚がほとんど見られない。アシ原等の緩衝帯が連続する干潟環境を好む。
存在を脅かす要因・保全の留意点	河川や沿岸開発による生息環境の消失や水質汚濁による生息環境の悪化の危険性がある。とくに本種は水陸両生であるため仔魚期を過ごす健全な水環境、成魚を支える干潟環境の双方が必要となる。本種の見られる干潟は干出時間の長い高潮帯があり干潟攪乱要因の緩衝帯(橋脚、中洲、ヨシ群落等)が存在し、底生生物が豊富な泥質で水たまりや滞筋が点在する等の特徴があるため、このような環境を維持することが重要となる。構造物による遮蔽にともなう水質の変化、個体群の縮小やそれにとまなう分断にとまなう遺伝的劣化が懸念される。
特記事項	—
産地情報	呉市(呉、蒲刈、安浦)、竹原市、三原市、尾道市、福山市

清水則雄・内藤順一・大塚 攻・坂井陽一・橋本博明 2011. 準絶滅危惧ハゼ科トビハゼ *Periophthalmus modestus* の広島県における現状. 広島大学総合博物館研究報告, 3: 97-102.

(清水則雄)

**マサゴハゼ 準絶滅危惧(NT) NT-b**

*Pseudogobius masago* (Tomiyama, 1936)

スズキ目 ハゼ科

環境省: VU

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	体長 3 cm 程度の小型のハゼ類で、体が円筒形でやや伸長する。吻は短い丸く突出し、上唇を覆う。類に鱗はないが、鰓蓋には鱗がある。背鰭は 2 基で、第 1 背鰭棘は伸長せず、第 2 背鰭と臀鰭の軟条は 7 本、胸鰭軟条が 16 本、腹鰭は吸盤状である。体色は透明感のある淡い灰色で、体側中央から尾鰭基部にかけて小黒色斑が縦列する。尾鰭基部にはひょうたん形の 1 黒色斑がある。第 1 背鰭に大きな斑紋はない。東北から九州までの日本列島沿岸、沖縄島や朝鮮半島に分布する。デトリタスや小型の底生動物を食べる。繁殖期は夏季と考えられ、仔魚は内湾の汀線付近で浮遊生活を送った後に底生生活に移行する。生後 1 年で成魚となる。
生息・生育状況	県内の生息地は中部から東部にかけての河口干潟や前浜干潟で確認されており、感潮域に広くみられるが、個体数は多くない。干潮時に滞筋や溜りとなる場所によく見られ、底質は砂質から泥質の場所を好む。小型種であって個体の追跡は難しいが、既知産地では継続的に観察されている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生息地は市街地に隣接する事も多く、河川および近接する陸域や水域の環境変化に対して影響を受けやすい干潟である。また、干出するような浅所は着底期の仔魚の重要な生息地である。埋め立てによる干潟の減少や汚濁の進行によって生息適地が減少している。とくに有機物量の増加は本種の生息に影響を及ぼしている可能性がある。埋め立て、浚渫、護岸工事等による生息地の消失、周辺からの水質汚染、底質の有機汚染等が考えられる。
特記事項	生息環境が大きく広がる生息地では広域に分布して、狭い範囲内での確認数も多く、比較的普通にみられる。干潟において汀線際で多く見られる場合もあることから、潮汐に合わせた移動も考えられる。一方、他地域から分断された狭小な生息地では個体数が少ないこともある。
産地情報	呉市(安浦)、竹原市、三原市(三原)、尾道市(尾道、因島)、福山市(福山、沼隈)、廿日市市(宮島)、江田島市(能美)、大崎上島町(大崎、東野)

吉郷英範 2015. 広島県の陸水性魚類. 比和自然科学博物館研究報告, 56: 91-181. 10 pls.

道津喜衛 1958. マサゴハゼの生活史. 九州大学農学部学芸雑誌, 16: 359-370.

(吉郷英範)

**アワユキセジロハゼ 準絶滅危惧(NT) NT-b**

*Clariger chionomaculatus* Shiogaki, 1988

スズキ目 ハゼ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長 4 cm 程度になる。本種は眼の下に髭状の皮褶があり、第一背鰭棘条が 3 本、第二背鰭軟条数が 13 本、臀鰭軟条数が 14 本、胸鰭軟条数が 19~20 本で上端の軟条は遊離、体表に鱗がない、第一背鰭と第二背鰭の間隔が体高よりも狭い、体の背面に大きな白斑があつて胸鰭上の斑紋が胸鰭下部まで帯状につながっていることで同属他種から識別できる。ただし、これまでに知られている分布域が東北地方(青森県・岩手県・宮城県)であることから、両個体群の詳細な分類の再検討も必要と考えられる。広島県では能美島周辺海域から確認されている。
生息・生育状況	県下の確認地点は、いずれも自然度の高い海浜域に近い場所にある人為改変のない離岩周辺である。このような生息実態から、間接的な周辺地域の改変を含めて本種が人為的影響を強く受けやすいことが予期される。既知産地以外に生息記録がなく、これまでのところ不連続分布であることから、県下の個体群の固有性は高いと考えられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	県下における生息情報は乏しいが、生息地は沿岸から少し離れた離岩周辺であることから人為的改変に影響を受けやすいものと考えられる。護岸整備や構造物構築などの人為的な改変などの攪乱により、生息環境の減少や劣化が懸念される。本種の生息域を直接改変することがなくても、その周辺で構造物が構築されると海流の流れに変化が起こって、生息に不適な環境となる可能性もある。
特記事項	県下における分布は、既知産地(東北地方)から著しく離れており、瀬戸内海周辺水域を含め西日本からの知見がない。広島県から確認された個体群は瀬戸内海で独立した個体群を形成する可能性もあるが、形態的特徴に基づいて本種として扱う。確認場所は干潮時に水深 1 m 程度の水底にある石の下や岩盤の間であり、イワガキなどが固着する潮間帯下部よりもさらに深い場所である。
産地情報	江田島市(能美)

Shiogaki M. 1988. A new gobiid fish of the genus *Clariger* from Mutsu Bay, northern Japan. Japanese Journal of Ichthyology, 35: 127-132.

吉郷英範・吉郷飛翠 2016. 広島県の魚類 3(マダラギンボ、ミサキウバウオ、アワユキセジロハゼ、セジロハゼ). 比婆科学, 258: 25-27.

(吉郷英範)

ショウキハゼ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b

*Tridentiger barbatus* (Günther, 1861)

スズキ目 ハゼ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長は 10 cm 近くになり、髭状の皮褶が頬や下顎に多数みられる。第 1 背鰭の縁辺は丸い。第 1 背鰭は 6 棘, 第 2 背鰭は 1 棘 10~11 軟条, 臀鰭は 1 棘 9~10 軟条, 胸鰭は 20~23 軟条。体は淡褐色で, 斜め前下方へ伸びる暗色横帯があり, 尾柄部の明色がよく目立つ。カキ殻等の内側に産卵し, 雄が卵を保護する。おもに多毛類や小型甲殻類を食べている。日本では有明海や瀬戸内海に分布し, 広島県では芦田川の感潮域に広がる泥質干潟で, 初春から夏にかけて点在する転石の下でみられる。干潟環境には繁殖のために沿岸域に來遊していると考えられ, 冬季などは海域から記録されている。
生息・生育状況	年により生息環境の状況が異なっており, 通常は転石下の間隙に見られる。年によって本種が比較的普通にみられるが, 生息地の転石が泥で埋まって隙間がない時はほとんど確認できない。生息環境の変化に敏感と考えられ, 繁殖にも影響を及ぼしていると思われる。生息域周辺の改変や構造物の構築などの人為的改変が直接的・間接的に生息環境に影響を及ぼす懸念がある。また, 県下の個体群はこの地域に瀬戸内海固有の集団と考えられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	本種は軟泥底の干潟に生息しているが, その中でも生息環境の志向に一定の傾向が見られる。埋立や護岸整備などの人為的な改変などの攪乱により, 生息環境の減少や劣化が懸念される。本種の生息域を直接改変することがなくても, その周辺で構造物が構築されると海流の流れに変化が起こって, 底質の改変が起こって生息に不適となる可能性もある。
特記事項	日本の既知産地は有明海と瀬戸内海では不連続分布であり, 互いの個体群はそれぞれ独立していると考えられる。瀬戸内海周辺地域では, 山口県・岡山県・香川県などから記録されており, 広島県を含む瀬戸内海水域に固有の個体群が形成されていると考えられる。個体群間では繁殖生態などの生活サイクルだけでなく, 環境基盤の微妙な相違が存在していると考えられる。
産地情報	福山市 (福山)

Inui R., Takemura S., Koyama A. and Onikura N. 2014. Potential distribution of *Tridentiger barbatus* (Günther 1861) and *Tridentiger nudicervicus* (Tomiyama 1934) in the Seto Inland Sea, western Japan. *Ichthyological Research*, 61: 83–89.

吉郷英範 2015. 広島県の陸水性魚類. 比和自然科学博物館研究報告, 56: 91–181. 10 pls.

(吉郷英範)

フタスジカジカ 準絶滅危惧(NT) NT-b

*Icelinus japonicus* Yabe, Tsumura & Katayama, 1980

スズキ目 カジカ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長は 5 cm 未満で, 背鰭は 9~10 棘 12~13 軟条で棘部と軟条部の 2 基に分かれ, 臀鰭は 10~11 軟条, 胸鰭は 15~17 軟条, 腹鰭は 1 棘 2 軟条で小さい。前鰓蓋骨最上棘がやや長くて先端がわずかに 2 又する後頭部に 3 対の皮弁がある。県下に生息するカジカ科魚類の多くと同様に体側に幅広い黒色横帯があるが, 側線上と背鰭基底下方に縦列した鱗列があることで識別できる。本種には性的二型が存在し, 雄では背鰭や臀鰭がやや大きく暗化するものの, 雌では鰭膜が透明で斜黒点列が存在する。生息地は日本海周辺海域のほか, 黄海からも知られている。
生息・生育状況	県下では潮通しがよい岩礁域にある潮間帯や潮下帯などの沿岸域で, 大潮の干潮時に汀線際となるテトラポッド際や潮溜まりから見つかっており, 岩場等の隙間などに潜んでいる。このような場所は海流が強い環境であることが多く, 海岸域の護岸開発によって人為的改変の影響を受けやすい場所である。また, 潜在的に生息可能と考えられる環境も少ない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	埋立や護岸整備などの人為的な改変などの攪乱により, 生息環境の減少や劣化が懸念される。本種が見られる環境は外装が茂った岩礁などの隙間があることが共通しており, 生息域を直接改変することがなくても, その周辺で構造物が構築されると海流の流れに変化が起こって, 隙間が埋没するような変化が起こって生息に不適となる可能性もある。
特記事項	本種は山口県宇部市(瀬戸内海)の標本を含めて 1980 年に記載されたが, 以後は瀬戸内海からの報告がなかった。日本ではおもに日本海から知られているが, 山口県や広島県などにみられる瀬戸内海の個体群の規模は小さいと考えられる。広島県では冬季から春季に採集されており, これまで夏季や秋季に確認されていない。このような季節消長は生殖活動に基づいた垂直移動を行っている可能性もある。
産地情報	呉市 (蒲刈, 川尻), 尾道市 (因島), 東広島市 (安芸津)

Yabe M., Tsumura K. & Katayama M. 1980. Description of a new cottid fish, *Icelinus japonicus*, from Japanese waters. *Japanese Journal of Ichthyology*, 27: 106–110.

吉郷英範・吉郷飛翠 2018. 広島県の魚類 7 (吉郷 2018 の補遺). 比婆科学, 263: 23–32. 1 pl.

(吉郷英範)

**サクラマス(ヤマメ) 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b, NT-c, NT-d**

*Oncorhynchus masou masou* (Brevoort, 1856)

サケ目 サケ科

環境省: NT

広島県 2011: AN

広島県 2003: CR+EN

概要	河川に残留した個体をヤマメ、海に降り大きく成長し、母川回帰をした個体をサクラマスと呼んでいる。近年、ダム湖などに降湖して成長したサクラマス降湖型も確認されている。本県では江の川水系に分布していたが、放流により、瀬戸内海側の河川にも生息する。幼魚期(ヤマメ)は1年間、上流域で生活して降海し、その後1.5年間海域で生活し、母川回帰する両側回遊魚である。全長40~55cm、遡上期は銀白色であるが、繁殖期には黒緑色に変わり、雄は赤い横斑の婚姻色を発現する。朱点はない。本県では「ひらべ・ひらめ」と呼ばれることが多い。
生息・生育状況	降海型は6月中旬頃には比和、西城などの繁殖地まで遡上し、10月中旬頃に繁殖する。繁殖後に死滅し、満3歳で生活史を完了した。浜原発所や熊見発電所の構築により、降海型は絶えたが、西城川では熊見発電所の貯水池に降湖したサクラマス降湖型が確認されている。一方、ヤマメ(♂)はスニーカーとして繁殖に加わり、繁殖後に死なない。多くは漁業組合の放流により個体数が維持されていると考えられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	サクラマスは両側回遊魚であるから、ダムや農業堰は障害物となる。また、魚道が設置されても水量の減少により、遡上ができないことが多い。一方、ヤマメ(幼魚期)は皆伐、スキー場、林道工事などにより表土が流出し、溪流の礫間が目詰まり、水生昆虫や落下昆虫の減少により、溪流環境が悪化している。また、ヤマメ域にアマゴが放流され、交雑による遺伝子汚染が生じていると考えられる。
特記事項	鈴張川(安佐北区)、瀬野川(熊野町)、筒賀川で採集されたことがあるが、個人による放流と思われる。近年は内水面の指導が進み、本種は江の川水系のみに放流されるようになったが、在来個体群の生息はきわめて低いと考えられる。サクラの芽が吹く頃から咲く頃に海から遡上することから、サクラマスの和名がある。三型(サクラマス降海型・ヤマメ(残留型)・サクラマス降湖型)とも、河川の最上流域に遡上して繁殖する。
産地情報	広島市(安佐南区, 安佐北区), 三次市(三次, 甲奴, 君田, 布野, 作木, 吉舎, 三良坂, 三和), 庄原市(庄原, 総領, 西城, 口和, 高野, 比和), 安芸高田市(吉田, 八千代, 美土里, 甲田, 向原), 安芸太田町(筒賀)

内藤順一 2008. 西城川水系における魚類相の変遷. 西城川上流域の瀬・淵・環境と魚類相の変遷. p. 61-73. 平成19年度(財)河川環境管理財団助成事業. 三次市.

内藤順一 2000. 広島県動物誌資料(6). 比婆科学, 194: 23-28. 4 pls.

(内藤順一)

**サツキマス(アマゴ) 準絶滅危惧(NT) NT-b, NT-c, NT-d**

*Oncorhynchus masou ishikawae* Jordan & McGregor, 1925

サケ目 サケ科

環境省: NT

広島県 2011: AN

広島県 2003: CR+EN

概要	日本固有亜種で、河川に残留した個体をアマゴ、海に降り大きく成長し、母川回帰をした個体をサツキマスと呼ぶ。近年、ダム湖などに降湖して成長したサツキマス降湖型も確認されている。本県では小瀬川・太田川・帝釈川(高梁川水系)に分布していたが、日本海へ流出する河川や芦田川などにも放流されている。幼魚期(アマゴ)は1年間、上流域で生活し、降海し、その後0.5年間海域で生活し、母川回帰する両側回遊魚である。全長30~50cm、遡上期は銀白色であるが、繁殖期には黒緑色の棒状に変わり、雄は赤い横斑の婚姻色を発現する。体側には朱点がある。サツキの花が咲く頃に海から遡上することからサツキマスの和名がある。
生息・生育状況	降海型は5月中旬頃には芸北、帝釈などの繁殖地に遡上した。10月中旬に繁殖し、雌雄は死滅し、満2歳で生活史を完了する。立岩・樽床・王泊・帝釈ダムの構築により、降海型は絶えたが、太田川の可部、水内川、西宗川へは遡上している。聖湖や温井ダムでは降湖型が確認されている。一方、アマゴ(♂)はスニーカーとして繁殖に加わるが、死なない。4~5年の寿命と思われる。多くは、漁業組合の放流により個体数が維持されている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	サツキマスは両側回遊魚であるから、ダムや農業堰は障害物となる。また、魚道が設置されても水量の減少により、遡上ができないことが多い。一方、アマゴは皆伐、スキー場、林道工事などにより表土が流出し、溪流の礫間が目詰まりし、水生昆虫や落下昆虫の減少により、溪流環境が悪化している。また、アマゴ域にヤマメが放流され、交雑による遺伝子汚染が生じていると考えられる。
特記事項	太田川水系では最上流域の雲月山山麓や三段峡や旧吉和村まで遡上していたが、王泊ダムや温井ダム・立岩ダムが構築されて以降、遡上は柴木川水系の三段峡発電所や打梨発電所(鱒溜ダム)までである。近年は内水面の指導が進み、本種は瀬戸内海に流れ込む水系に放流されるようになったが、個人による放流も多く、在来個体群の生息はきわめて低いと考えられる。
産地情報	広島市(東区, 安佐南区, 安佐北区, 佐伯区), 呉市(音戸, 安浦), 庄原市(庄原, 西城, 東城, 高野, 比和), 東広島市(西条), 廿日市市(廿日市, 佐伯, 吉和), 安芸太田町(加計, 筒賀, 戸河内), 北広島町(芸北, 大朝, 豊平), 大崎上島町(大崎), 神石高原町(神石)

内藤順一 2001. 広島県動物誌資料(10). 比婆科学, 201: 27-32. 3 pls.

内藤順一・田村龍弘・河野曉彦 2014. 北広島町の淡水魚類. 北広島町の自然. p. 501-520. 22 pls. 資料6. 北広島町教育委員会, 北広島町.

(内藤順一)

**ゼゼラ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Biwia zezera* (Ishikawa, 1895)

コイ目 コイ科

環境省: VU

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	体長 6 cm 程度。体は細長く、前部がやや縦扁し後部が側扁する。吻は丸くて短い。口は小さく下向きで突起やひげはない。尾鰭は又型で背鰭の背縁はやや弧状にくぼむ。体は淡褐色で、体側に円形の暗色斑が縦列しており、胸鰭、背鰭および尾鰭には鰭条に沿って褐色の斑点が並ぶ。産卵期には雄は胸鰭に追星が発現し、体色が黒ずむ。河川の下流域や平野部の湖などあまり流れのない砂泥底の場所を好み、胸鰭を開いて体を支えるようにして水底に定座していることが多く、砂の中に潜らない。山陽地方の在来個体群は、九州や東海地方の個体群に比べて琵琶湖水系の個体群に遺伝的に近いとされる。
生息・生育状況	芦田川下流域や周辺水路では普通にみられる年とほとんど見られない年があり、年変動が著しい。感潮域にも生息しているが、一時的な侵入と考えられる。上流のダム湖でも生息情報があるものの、これは外来個体群と考えられる。また、江の川、太田川、高梁川水系からの記録もあるが、これらは外来と考えられるため上記には広域の産地情報で分布を記載した。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生活史が短いことから短期間の影響でも個体群動態に顕著な影響が現れる。アユの放流にともなって侵入の可能性がある他地域の個体群やヨドゼゼラとの交雑によって固有遺伝子の喪失が懸念される。
特記事項	日本の本種にはいくつかの地域集団が認められており、芦田川の個体群は遺伝的に岡山県の個体群に近く、山陽地方の固有個体群に含まれる。繁殖期は4~7月で、卵はヨシの根本等に産みつけられ、雄がこれを守る。卵は寒天質で包まれて隣接した卵とくっついて卵塊となる。雌雄とも1年で成熟し、多くの場合1年で一生を終える。底生生物やデトリタス等を食べる。
産地情報	広島市、福山市(福山)、三次市、安芸高田市、世羅町、神石高原町

Watanabe K., Kawase S., Mukai T., Kakioka R., Miyazaki J.-I. & Hosoya K. 2010. Population divergence of *Biwia zezera* (Cyprinidae: Gobioninae) and the discovery of a cryptic species, based on mitochondrial and nuclear DNA sequence analyses. *Zoological Science*, 27: 647-655.

吉郷英範 2015. 広島県の陸水性魚類. 比和自然科学博物館研究報告, 56: 91-181. 10 pls.

(吉郷英範)

**タモロコ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Gnathopogon elongatus elongatus* (Temminck & Schlegel, 1846)

コイ目 コイ科

環境省: なし

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	本亜種は東海地方以西の本州、四国の瀬戸内海側および高知県四万十川水系に自然分布する。東北地方と九州の一部は移植分布で、関東地方は移植か自然分布か不明。全長は最大 10 cm 程度で体はやや太い紡錘形だが、ダム湖やため池では体型が細長くなる傾向にある。吻は丸く口は下方にあり、1対の短い口ひげがある。体側中央には1本の太い縦条が走る。河川中下流域や細流、用水路、湖沼、ため池などの淀んだ水域に生息する。繁殖期は4~7月で、産卵は細流や用水路、水田で行われ、植物の根などに卵を産み付ける。水田に侵入できる場所では、水田を産卵場所として積極的に利用する。
生息・生育状況	世羅町などの中山間地域では1990年代前半頃まで河川本流や支流、周辺用水路で個体数が多かったが、その後圃場整備にともなう用水路の改変や水域の連続性の分断等により激減した。沼田川・芦田川下流域の水田地帯では1960年代の一次整備以降大きな改変がなく、用排兼用水路の堰上げ灌漑によって水域の連続性が保たれており現状では個体数が多いが、近年の二次整備で用排水分離が進みつつあり、本亜種への影響が懸念される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	河川改修や用水路のコンクリート化・構造改変等による水生植物の豊富な緩流部の消失・縮小と水域の連続性の分断が脅威で、ため池ではオオクチバス等の食害により本種が絶滅した池がある。河川やため池では水生植物が豊富な浅場の保全が必要。用水路や細流では生活環を完結できる水域ネットワークが必要で、用水路と連続性のある水田を起点に移動分散範囲とされる 500 m 以内に水生植物が生育する水路環境の保全が望まれる。
特記事項	本亜種は生息に多様なマイクロハビタットや水域の連続性を必要とし、本亜種が生息している場所は他の魚類の種多様性が高く、その個体数も多いことが指摘されており、環境の指標性が高いことで注目されている。なお、遺伝的特徴から黒瀬川と芦田川の個体群は在来とされるが、小瀬川、太田川、成羽川は産地が限定的で国内外来の可能性もある。また、走島の個体群は、釣り餌起源と考えられている。
産地情報	広島市(安佐北区)、三原市(三原、本郷、久井)、尾道市(御調)、福山市(福山、神辺、新市)、三次市(三次、吉舎、三良坂)、庄原市(庄原、総領)、大竹市、東広島市(西条、黒瀬、豊栄)、安芸高田市(八千代)、北広島町(芸北)、世羅町(世羅、甲山、世羅西)、神石高原町(油木)

吉郷英範 2015. 広島県の陸水産魚類. 比和科学博物館研究報告, 56: 91-181.

内藤順一・田村龍弘 1996. 広島県灰塚ダム周辺地域の淡水魚類. 灰塚ダム湖とその周辺の自然(灰塚ダム湖とその周辺の自然編集委員会編), p. 217-251. 灰塚ダム湖地質動植物学術調査団, 三次.

(中西 毅)

**カワヒガイ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**  
*Sarcocheilichthys variegatus variegatus* (Temminck & Schlegel, 1846)  
 コイ目 コイ科

環境省: NT  
 広島県 2011: AN  
 広島県 2003: なし

概要	本亜種は、琵琶湖以西の本州（山口県を除く）、九州北西部および壱岐島に分布する。全長は10～20 cm程度。頭は小さく体は側扁した紡錘形で、口は小さく1対の短い口ひげを備えるかこれを欠く。体色は全体的に黄褐色で、体側に黒色縦帯のあるものが標準的である。おもに河川の中下流域や周辺用水路の緩流部の砂礫底に生息し、岩や沈水植物の隙間に潜む。小型の底生動物や付着藻類などを食べる。繁殖期は5～7月で、雌は短い産卵管を二枚貝の入水管に挿入し、卵を外套腔内に産着させる。
生息・生育状況	手城川を含む芦田川水系と江の川水系に自然分布する。芦田川下流域と周辺用水路は比較的個体数が多いが、他所では少なく、減少傾向にあると考えられる。芦田川上流域や江の川中流域（可愛川）ではオバエボシガイがみられなくなり、他の二枚貝も減少していることから、産卵母貝の減少が減少の一因となっている可能性がある。太田川水系、沼田川水系、成羽川水系の個体群は、琵琶湖産アユの放流にともなう移入個体群と考えられている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	河川改修や用水路のコンクリート化による障害物が多い環境や産卵母貝の生息に適した底質の消失・縮小が脅威となっている。改修等に際しては空隙が多い水中環境への留意とイシガイ、オバエボシガイ、マツカサガイ、ニセマツカサガイ等の産卵母貝が生息可能な底質環境の保全が重要である。また、琵琶湖産稚アユの放流にともなう近縁亜種のビロヒガイが移植され、本亜種との交雑が懸念されている。
特記事項	広島県は本種の本州における分布の西限にあたり、保護上重要と考えられる。なお、近年の研究により、伊勢湾周辺の個体群は遺伝的に大きく異なり、別種の可能性が示唆されている。
産地情報	広島市（安佐南区、安佐北区）、三原市（三原、大和、本郷）、福山市（福山、神辺、新市）、府中市（府中）、三次市（三次、作木、三良坂、三和）、庄原市（庄原、東城）、安芸高田市（吉田、八千代、高宮、甲田）、安芸太田町（戸河内）、世羅町（世羅、甲山）、神石高原町（油木、神石）

吉郷英範 2015. 広島県の陸水産魚類. 比和科学博物館研究報告, 56: 91-181.  
 比婆科学教育振興会 1990. 広島県の淡水魚. 230 pp. 中国新聞社, 広島.

(中西 毅)

**ヌマムツ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**  
*Candidia sieboldii* (Temminck & Schlegel, 1846)  
 コイ目 コイ科

環境省: なし  
 広島県 2011: AN  
 広島県 2003: なし

概要	本種は静岡県から瀬戸内海沿岸域の本州と九州の有明海沿岸域に分布する。関東地方では移植個体が近年増加している。全長は最大で20 cm程度。カワムツと体色や形態が似るが、本種は胸鰭と腹鰭の前縁が朱色（カワムツは黄色）で、尻鰭の分岐軟条数は多くが9（カワムツは10）である。平野部の河川下流域や池沼、流れの緩やかな用水路がおもな生息地だが、広島県では河川上流域の盆地内の緩流区間やその周辺のため池にも生息する。カワムツとの混生河川ではすみわけがみられ、本種は流れのないよどみに集中し、カワムツは流れのある瀬に多い。水生昆虫や落下昆虫、藻類などを食べる。繁殖期は5～8月で、砂礫底の浅瀬で産卵する。
生息・生育状況	県内では江の川水系、太田川水系、黒瀬川水系、沼田川水系、芦田川水系、手城川水系の限られた区間もしくは支流と周辺の用水路に生息し、世羅台地と西条盆地では一部のため池にも生息する。芦田川下流域は比較的個体数が多いが、それ以外は少ない。ため池の生息地ではオオクチバスなどの外来種による食害の影響が大きく、これらが放流されていないことが生息要件になっている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	河川改修や用水路のコンクリート化による緩流部の消失や環境の単調化は、本種の生息に適した緩流部や産卵場所となる緩やかな流れの砂礫底の消失・縮小を招いている。また、過度な取水による水量減少によって産卵適地が限定され、その結果オイカワと産卵場所が重複し、交雑個体が増加しており脅威となっている。ため池の生息地はオオクチバスなどの外来種の食害によって大幅に減少した。これらの放流を厳に慎むべきである。
特記事項	ヌマムツとカワムツは1846年に記載されていたが、その後長きにわたって混同されカワムツとして扱われてきた。1989年以降はカワムツA型とカワムツB型として区別されるようになり、2003年にはA型にヌマムツの和名が与えられた。県内では河川下流域に加えて、上流域にあたる世羅台地や西条盆地の緩流河川と周辺ため池にも生息地が点在しており、生物地理学上貴重と考えられる。
産地情報	広島市（安佐北区）、三原市（三原、大和、本郷、久井）、尾道市（御調）、福山市（福山、新市）、三次市（三次、吉舎、三良坂）、東広島市（西条、高屋、黒瀬）、安芸高田市（甲田）、世羅町（世羅）

細谷和海 1993. コイ科. 日本産魚類検索全種の同定第三版(中坊徹次編). p. 308-327. 東海大学出版会, 東京.  
 吉郷英範 2015. 広島県の陸水産魚類. 比和科学博物館研究報告, 56: 91-181.

(中西 毅)

**ニホンウナギ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Anguilla japonica* Temminck & Schlegel, 1847

ウナギ目 ウナギ科

環境省: EN

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	本種は日本各地、中国本土、台湾、韓国に広く分布し、遺伝的な差のない単一の集団とされる。広島県でも沿岸部を中心に各水系に生息するが、ダム上流部等の個体は放流されたものと考えられる。体は円筒形で細長く、全長は最大 1.3 m 程度。体色は背側が黒っぽく腹側が淡色が多いが変異に富む。河川全域と周辺用水路、池沼、河口の汽水域および沿岸域に生息し、昼間は石の下や水際植生、落ち葉等の堆積物に隠れ夜間に活動する。成熟が始まった成魚は、秋～冬に太平洋マリアナ諸島西方の産卵場に向かって回遊する。産卵期は春～夏で、孵化したレプトセファルス幼生は海流によって運ばれ、太田川では変態したシラスウナギが 6～7 月頃遡上する。
生息・生育状況	かつては県内の各水系で普通に見られ、食用として多く捕獲されていたが、ダム等の建設により内陸部の自然分布域が広く消滅した。また、河口堰や頭首工、落差工等の設置によって遡上が困難となり、生息範囲が縮小した河川が多い。沿岸部の小規模河川の下流域では 1990 年代頃まで幼魚が多産したが、護岸整備や植生が豊かな寄洲の撤去等によって好適な成育場所が減少し、個体の確認がまれになった河川が多くみられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	河川流域では改修等による隠れ場所の減少や堰・水門等の設置による水域の分断が減少の一因と考えられ、水中の多孔質空間の確保と水域の連続性への留意が必要である。また、本種は河川生態系の上位捕食者であることから、餌生物が豊富な健全な河川環境の維持が望まれる。なお、シラスウナギの減少は気候変動にともなう産卵場所や回遊経路の変動によるところが大きいとされ、自治体レベルでの具体的な対策は困難と考えられる。
特記事項	県内の漁協放流が行われている大河川では天然遡上個体の動向の詳細は不明だが、小規模河川と同様に減少している可能性が考えられる。芦田川河口堰では、シラスウナギの遡上に配慮した魚道ゲートの運用や専用魚道の設置などの取り組みが行われている。また、広島県では、10 月から 3 月まで産卵のために川を下る親魚の捕獲が禁止されている。
産地情報	広島市（全区）、呉市（下蒲刈・豊浜を除く）、竹原市、三原市（久井を除く）、尾道市（御調を除く）、福山市（福山、沼隈）、府中市（府中）、三次市（三次、甲奴、作木、吉舎、三良坂）、庄原市（庄原、総領、西城、東城、高野、比和）、大竹市、東広島市（河内、安芸津）、廿日市市（全田市町村）、安芸高田市（吉田、八千代、高宮、甲田、向原）、江田島市（大柿）、海田町、熊野町、坂町、安芸太田町（加計、筒賀、戸河内）、北広島町（芸北、大朝、千代田）、大崎上島町（大崎、東野）、世羅町（甲山、世羅西）、神石高原町（油木、神石）

比婆科学教育振興会 1990. 広島県の淡水魚. 230pp. 中国新聞社, 広島.

吉郷英範 2015. 広島県の陸水産魚類. 比和科学博物館研究報告, 56: 91-181.

(中西 毅)

**ヤリタナゴ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Tanakia lanceolata* (Temminck & Schlegel, 1846)

コイ目 コイ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	本種は本州・四国・九州北部に自然分布する。関東地方の個体群は移植と考えられている。全長は 10 cm 程度。体は側扁し、他のタナゴ類と比べて体高は低めで 1 対の口ひげを持つ。産卵期の雄は体側前方が赤みを帯び、下腹部が黒くなる。おもに傾斜の緩やかな河川や用水路に生息し、生活史にともなう河川の降下・遡上や河川と用水路、幹線と支線用水路間等の移動を行う。成魚は流れの速い場所を好み、底生動物や付着藻類を食べる。繁殖期は 4～8 月で、雌はマツカサガイ、ニセマツカサガイ、カタハガイ等の二枚貝類の出水管に産卵管を挿入し、鰓葉内に産卵する。稚魚は河川下流の静水域や流れのない支線水路などで動植物プランクトンを食べて成長する。
生息・生育状況	江の川、太田川、黒瀬川、沼田川、芦田川、手城川の各水系に分布し、平野部や盆地の緩流区間と周辺用水路に生息する。成羽川水系は移入とされている。1990 年代までは芦田川や沼田川の下流域で多産したが近年激減し、黒瀬川では絶滅に近い状態である。河川や用水路の改修と水質や底質の悪化にともなう産卵母貝の減少が本種の減少要因と考えられるが、近年のヌートリアによる二枚貝類の食害が減少を加速させている可能性がある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	産卵母貝の二枚貝類については、河川改修や用水路の改変による生息に適した底質環境の消失・縮小やヌートリアによる食害が脅威となっている。また、本種は季節や発育ステージに応じて流水域と静水域を比較的広域に移動して生活するため、多様な流況と水域の連続性がセットで存在することが生息条件となる。改修にともなう河川流路や用水路構造の単調化、移動を阻害する横断工作物、瀬切れをもたらす水管理等に留意が必要である。
特記事項	岡山県の用水路では、水量が低下する中干し期や非灌漑期には沈砂池等の深みに多くの個体が集結している。そのような場所は沿線の重要な生息拠点や越冬場所になっているが、狭い空間のため、観賞用として大量に捕獲されることがあり、近年は日常的にカワウの高い捕食圧に晒されるようになっている。広島県でも同様の事象が起きている可能性があり、留意が必要である。なお、黒瀬川水系ではアブラボテとの交雑が確認されている。
産地情報	広島市（安佐南区、安佐北区）、呉市（呉）、三原市（三原、本郷）、尾道市（御調）、福山市（福山、神辺、新市）、府中市（府中）、三次市（三次、作木、吉舎、三良坂）、庄原市（庄原、総領、東城、高野）、東広島市（黒瀬）、安芸高田市（吉田、八千代、高宮、甲田）、世羅町（甲山）

吉郷英範 2011. 既存資料に基づく広島県の陸水産魚類. 比和科学博物館研究報告, 52: 205-337.

吉郷英範 2015. 広島県の陸水産魚類. 比和科学博物館研究報告, 56: 91-181.

(中西 毅)

**ドジョウ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor, 1842)

コイ目 ドジョウ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	本種は日本に広く分布するが、北海道は移入と考えられている。広島県でも各水系に広く分布するが、島嶼部は移入の可能性が高い。河川や周辺の細流、用水路、水田、湿地、池沼などに生息する。体は褐色で細長く全長 10 cm 程度で、口ひげは 5 対。尾鰭基部の上側に黒斑がある。普段は通年通水のある河川や用水路にすみ、植物が多い場所を好む。泥底上を泳ぎ回り、泥に潜って生活する。繁殖期は 5~8 月で、水田や水田周辺の小溝などの一時的水域に移動して産卵する。産卵後、成魚と仔稚魚は水田等でしばらく生活した後、落水ともなって降下する。越冬はおもに恒久的水域で行われるが、湿地では湛水してなくても湿った土の中で越冬する。
生息・生育状況	県内では沿岸部から山間部にかけて広く生息し個体数も多かったが、1980~1990 年代の圃場整備にともなう用水路のコンクリート化、用排水分離、乾田化等によって生息環境が大きく劣化し、個体数が激減した。近年は回復傾向の地域もみられるが、中山間地域など集落規模の広い面積で整備が行われた地区では、生息拠点や水域ネットワークが消滅したままの状態のところが多く、そのような地区では本種の回復が認められない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	圃場や用水路の構造改変にともなう泥底や植物が豊富な環境の消失・縮小と恒久的水域と一時的水域の分断が生息や繁殖移動の阻害要因で、季節通水による非灌漑期の干出や乾田化が越冬場所の消失を招いている。本種が生活環を全うできる底質、植生、水域の連続性、冬季の通水・湛水に留意が必要。また、近年のブロックローテーション下では圃区単位で 1 年以上水稻栽培が行われなくなるため、当該地の個体群への影響が大きいと考えられる。
特記事項	本種は腸呼吸や皮膚呼吸によって湿った土中での越冬や雨天時の陸上移動などを行い、湛水が不安定な湿地環境に適応した特異生態で水田生態系の代表種と言える。世羅町田打では、圃場整備エリアにおいて周年湛水の土水路(日寄せ)や水田魚道等によりドジョウを含めた水田生態系の保全活動が行われている。なお、世羅町川尻では近年国外外来個体群の形態的特徴を持つ個体が確認されており、在来個体群との競合や交雑が懸念される。
産地情報	広島市(東区、安佐南区、安佐北区、安芸区、佐伯区)、呉市(呉、蒲刈、安浦)、竹原市、三原市(三原、大和、本郷、久井)、尾道市(尾道、御調、向島)、福山市(福山、神辺、新市)、府中市(府中、上下)、三次市(三次、甲奴、君田、布野、作木、吉舎、三良坂、三和)、庄原市(庄原、総領、西城、東城、口和、高野、比和)、大竹市、東広島市(西条、八本松、志和、高屋、黒瀬、福富、豊栄、河内、安芸津)、廿日市市(廿日市、大野、佐伯、吉和、宮島)、安芸高田市(吉田、八千代、美土里、高宮、甲田、向原)、江田島市(大柿)、海田町、熊野町、坂町、安芸太田町(加計、筒賀、戸河内)、北広島町(芸北、大朝、千代田、豊平)、大崎上島町(木江)、世羅町(世羅、甲山、世羅西)、神石高原町(油木、神石、豊松、三和)

内藤順一・田村龍弘 1996. 広島県灰塚ダム周辺地域の淡水魚類. 灰塚ダム湖とその周辺の自然(灰塚ダム湖とその周辺の自然編集委員会編), p. 217-251. 灰塚ダム湖地質動植物学術調査団, 三次.

吉郷英範 2015. 広島県の陸水産魚類. 比和科学博物館研究報告, 56: 91-181.

(中西 毅)

**カワアナゴ 情報不足(DD) DD-a, DD-b**

*Eleotris oxycephala* Temminck & Schlegel, 1845

スズキ目 カワアナゴ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	本種は第 2 背鰭と臀鰭の軟条はそれぞれ 8 本、胸鰭軟条は 16~18 本、左右の腹鰭が癒合していない、頭部感覚管に開孔がない、前鰓蓋骨後縁端にある埋没した下向きの棘、明黄色の小斑が下顎に散在、頭部感覚突起列の形状等の特徴により近似種から識別される。日本では関東から九州までの太平洋、北陸地方から九州までの日本海・東シナ海沿岸で見られ、瀬戸内海でも散見されるが、琉球列島には見られない。本種は夜行性で物陰に潜む性質が強い両側回遊性の魚類で成魚の生息域で産卵するが、孵化後の仔魚は海域で遊泳生活を送る。全長 1 cm 程度で河川に遡上し、感潮域から下流に至って底生生活に移行する。
生息・生育状況	県内の生息環境は感潮域上端から下流部の緩流部にあるヨシなどの水際植生が生えている水衝部であり、川底には小石やコンクリート片が見られるが改変の影響を受けやすい。生息情報は少ないが、広島県周辺の瀬戸内海域他県でも広く知られていることから県内の他河川にも生息している可能性もある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生息地となる河川の開発やそれともなう川相変化により生息環境の消失、河川の遡上を阻害する河口堰建設、工事による河川の分断、水質汚濁等による生息環境の悪化が懸念される。
特記事項	県下では黒瀬川で散発的に記録があるのみで、生息情報が乏しいことから偶発的出現の可能性はある。しかし、九州や四国など暖流水域の河川では比較的普通に見られ、広島県周辺の瀬戸内海水域各地からも知られていることから生息環境の悪化を考慮して情報不足に位置付けた。また、同所的にみられることが多いヒナハゼは県下で増加傾向にある。
産地情報	呉市(呉)

吉郷英範 2009. 広島県黒瀬川のカワアナゴ(魚類:スズキ目). 比婆科学, 232: 31-32.

吉郷英範 2015. 広島県の陸水性魚類. 比和自然科学博物館研究報告, 56: 91-181. 10 pls.

(吉郷英範)

## イドミミズハゼ 情報不足(DD) DD-a, DD-b, DD-c

*Luciogobius pallidus* Regan, 1940

スズキ目 ハゼ科

環境省: NT

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	体長 10 cm 近くになり、体が細長く、頭長は体長の約 1/5、体高は体長の約 1/10、眼は小さくて標本ではほとんど皮下に埋没し、尾鰭や胸鰭はよく発達して円形である。広島県産の調査標本では背鰭軟条が 10～11 本、臀鰭軟条が 10～11 本、胸鰭軟条が 12～14 本であった。生時の体色は桃～柿色である。本種名の下で西日本各地から記録されているものの、複数種の隠蔽種が混在している可能性があり、広島県の個体については広義のイドミミズハゼとする。広島県では海岸の湧水帯周辺で生息が確認されている。他のイドミミズハゼ種群の既知種とは背鰭軟条数が多い等でおもに識別されるものの、まだ複数種が混在する可能性もある。
生息・生育状況	県内における既知生息地は自然海岸の湧水付近であるが、湧水の減少など環境条件が悪化しており、近年確認できていない。このような環境自体は県内にまだ広く存在すると思われるが、本種の主要な生息環境は伏流水中であり、生息状況の把握が難しい。
存在を脅かす要因・保全の留意点	特異な生息環境に生息しているため生息実態について把握されていない。海岸開発による生息環境の消失や透水性の低下、伏流水湧出量の減少、水質汚濁による生息環境の悪化による影響が懸念される。また、生息環境の連続性が途切れることによって個体群の縮小が起こり、個体群の遺伝的多様性の劣化が懸念される。
特記事項	これまでにイドミミズハゼとして扱われてきた種には未記載種を含めて複数種が混在している可能性がある。そこでイドミミズハゼ種群のうち、ドウクツミミズハゼ <i>L. albus</i> 、ネムリミミズハゼ <i>L. dormitories</i> 、ナガレミミズハゼ <i>L. fluvialis</i> やユウスイミミズハゼ <i>L. fonticola</i> 等の既知種と一致しない個体群を広義のイドミミズハゼとして扱う。
産地情報	呉市 (安浦)、廿日市市 (廿日市)

渋川浩一・藍澤正宏・鈴木寿之・金川直幸・武藤文人 2019. 静岡県産ミミズハゼ属魚類の分類学的検討(予報). 東海自然誌, 12: 29-96.

吉郷英範・吉郷飛翠 2018. 広島県の魚類 7(吉郷 2018 の補遺). 比婆科学, 263: 23-32. 1pl.

(吉郷英範)

## ナガミミズハゼ 情報不足(DD) DD-a, DD-b

*Luciogobius elongatus* Regan, 1905

スズキ目 ハゼ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長 4 cm 程度で小さく、体は著しく細長い。ミミズハゼ属の中でもナガミミズハゼ種群は背鰭と臀鰭の基底が狭い。本種の各鰭の総鰭条数は、背鰭が 6～9 本、臀鰭が 8～10 本、胸鰭が 7～10 本である。また、本種には近年になって複数の隠蔽種が明らかにされ、タイプ産地である瀬戸内海にも複数の隠蔽種が混在している。広島県内から得られた個体は腹鰭は痕跡的で尾鰭基部を中心に暗色斑があるなど渋川ら(2019) が示したナガミミズハゼの特徴は一致する。暫定的にこのような特徴がある個体を本種として扱うが、一部に体型がやや異なる個体も混在することから、ナガミミズハゼ種群の別種がまだ存在する可能性もある。
生息・生育状況	県下では斎灘や備後灘などに面した海岸の 1～7 cm 程度の礫が点在する透水性の高い潮間帯に生息しており、礫下や粗い砂等の間隙中に生息し、とくに生息が確認される層では伏流水が湧出していることが多く、人為的改変の影響を受けやすい。県下にはこのような環境がほとんど存在せず、本種が潜在的に生息可能な環境も少ない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	護岸整備や構造物構築などの人為的な改変などの攪乱により、生息環境の減少や劣化が懸念される。本種の生息域を直接改変することがなくても、その周辺で構造物が構築されると海流の流れに変化が起こって、現存する環境が生息に不適となる可能性もある。
特記事項	本種は瀬戸内海から採集された標本に基づいて記載された種であるが、その具体的な産地は明確ではない。瀬戸内海では山口県や兵庫県からオチヨコナガミミズハゼも採集されており、この種も県下に生息する可能性がある。
産地情報	呉市 (倉橋, 豊)、尾道市 (因島)、福山市 (内海)

渋川浩一・藍澤正宏・鈴木寿之・金川直幸・武藤文人 2019. 静岡県産ミミズハゼ属魚類の分類学的検討(予報). 東海自然誌, 12: 29-96.

吉郷英範・吉郷飛翠 2018. 広島県の魚類 7(吉郷 2018 の補遺). 比婆科学, 263: 23-32. 1 pl.

(吉郷英範)

## オオミズハゼ 情報不足(DD) DD-a, DD-b

*Luciogobius grandis* Arai, 1970

スズキ目 ハゼ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	各鰭の総鰭条数は、背鰭が 15~17 本、臀鰭が 15~17 本、胸鰭が 16~18 本である。体長は 10 cm を超える個体も存在する。広島県の個体の多くは胸鰭上方の 4 軟条が遊離し、腹鰭の膜蓋後縁は中央がくぼんで 2 山状、背鰭と臀鰭が対称で体に対して弧状に広がる、背面から見た頭部前縁は角張っていることなどで本種の特徴が認められる。ただし、本種の生息地では躯幹部がより短く、胸鰭の上部にある遊離軟条が 2 本で下部が未分化、尾鰭後縁が裁断状、腹鰭の膜蓋が大きく突出した小型個体も見られるが、これは本種の未成魚と考えられる。本州、四国、九州沿岸域から広く記録されており、瀬戸内海水域では愛媛県や岡山県からも知られている。
生息・生育状況	県下ではいずれも斎灘や備後灘などに面した波あたりが強く透水性が高い砂礫海岸等に生息し、2~7 cm 程度の礫や玉石が積み重なった転石帯の間隙に生息する。しかし、県下にはこのような環境がほとんど存在せず、本種が潜在的に生息可能な環境も少ない。また、このような環境は人為的改変の影響を受けやすい場所である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	護岸整備や構造物構築などの人為的な改変などの攪乱により、生息環境の減少や劣化が懸念される。本種の生息域を直接改変することがなくても、その周辺で構造物が構築されると海流の流れに変化が起こって、現存する環境が生息に不適となる可能性もある。
特記事項	本種には遺伝的・形態的に識別可能な多くの隠蔽種が知られており、県下でもこのような未記載種が存在する可能性がある。今後本種を同定する際には留意しておく必要がある。
産地情報	呉市（豊）、三原市（三原）、尾道市（因島）

渋川浩一・藍澤正宏・鈴木寿之・金川直幸・武藤文人 2019. 静岡県産ミズハゼ属魚類の分類学的検討(予報). 東海自然誌, 12: 29-96.

吉郷英範・吉郷飛翠 2018. 広島県の魚類 7(吉郷 2018 の補遺). 比婆科学, 263: 23-32. 1 pl.

(吉郷英範)

## ヤリミズハゼ 情報不足(DD) DD-a, DD-b

*Luciogobius platycephalus* Siogaki & Dotsu, 1976

スズキ目 ハゼ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	広島産標本に基づく各鰭の総鰭条数は、背鰭が 11 本、臀鰭が 15 本、胸鰭が 14 本である。本種は体長は 8 cm 程度になり、頭部背面が扁平で吻が尖る、尾柄部がもっとも高い、臀鰭起部が背鰭起部よりも前方に位置することで類似種と識別可能である。海藻などが固着していない転石がある浜において大潮の干潮時に得られており、転石が積み重なった間隙から採集された。これまでに日本および韓国から報告されているが、遺伝的に異なる 2 群が存在することから明確な分布は詳細な再検討を要する。東北から九州にかけての太平洋沿岸や長崎県などから知られており、瀬戸内海水域でも愛媛県から報告されている。
生息・生育状況	県下では因島の波あたりの強く透水性が高い砂礫海岸において確認されており、生息環境は干潮時に干出する玉石状の浮石(礫の大きさはおおよそ 4~7 cm) が積み重なった転石帯の間隙に生息するが、このような環境が県下にはほとんど存在せず、本種が潜在的に生息可能な環境も少ない。このような環境は人為的改変の影響を受けやすい場所である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	護岸整備や構造物構築などの人為的な改変などの攪乱により、生息環境の減少や劣化が懸念される。本種の生息域を直接改変することがなくても、その周辺で構造物が構築されると海流の流れに変化が起こって、現存する環境が生息に不適となる可能性もある。
特記事項	渋川ら (2019) により記載されたハウチワヤリミズハゼとは胸鰭の形状が異なることで識別できる。Yamada et al. (2009) は本種に遺伝的に異なる 2 クレードを認めている。
産地情報	尾道市（因島）

渋川浩一・藍澤正宏・鈴木寿之・金川直幸・武藤文人 2019. 静岡県産ミズハゼ属魚類の分類学的検討(予報). 東海自然誌, 12: 29-96.

吉郷英範・吉郷飛翠 2018. 広島県の魚類 7(吉郷 2018 の補遺). 比婆科学, 263: 23-32. 1 pl.

(吉郷英範)

**ヒメギンポ** 情報不足(DD) DD-a  
*Springerichthys bapturus* (Jordan & Snyder, 1902)  
 スズキ目 ヘビギンポ科

環境省: なし  
 広島県 2011: なし  
 広島県 2003: なし

概要	最大体長 5 cm の小さな魚であり、タイドプールや岩上や消波ブロックなどの潮通しのよい隠蔽的な空間に棲む。青森県以南の日本海沿岸、宮城県以南の太平洋沿岸から九州沿岸に分布する。雄が婚姻色を呈する。詳しい生態の報告例はない。
生息・生育状況	岩礁の亜潮間帯に生息し、出現頻度はまれな種である。伊予灘青島（愛媛県）では 1996 年に標本が採取されている。また、同じく伊予灘の周防大島（山口県）および愛媛県佐田岬伊方町からは 2018 年に出現が確認されている。広島県では 2017 年に川尻町沿岸ではじめて出現が確認された（吉郷 2017）。その後の県内での記録はない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	存在確認の容易でない隠蔽的魚種であり、今後の推移を細心の注意をもって把握する必要がある。
特記事項	2017～2019 年の環境 DNA 分析調査により、宿毛湾、宇和海、佐田岬北岸、伊予灘長浜、屋代島南部においてヒメギンポの検出が為されており（柴田, 未発表）、南方水域に主要な分布を有する可能性が示唆されている。
産地情報	呉市（川尻）

吉郷英範 2017. 広島県の魚類 6（ヘビギンポ科）. 比婆科学, 260: 23-24.  
 岡村 収・尼岡邦夫編 2004. 日本の海水魚. 783pp. 山と溪谷社, 東京.

(坂井陽一)

**アマクサヨウジ** 情報不足(DD) DD-a, DD-b  
*Festucalex amakusensis* (Tomiyama, 1972)  
 トゲウオ目 ヨウジウオ科

環境省: なし  
 広島県 2011: なし  
 広島県 2003: なし

概要	県産標本の背鰭軟条は 19 本、胸鰭軟条は 12 本、臀鰭軟条は 4 本。体輪は躯幹部が 16 輪で、尾部が 36 輪、背鰭は比較的前方に位置し、その基底は狭く、基底下の体輪は 6.75 輪。主鰓蓋骨上には短い 1 本の縦走隆起線があるものの、胸鰭基底には隆起線がない。体側の中央隆起線は第 1 尾輪末端で終わる。全長 10 cm 程度。体色は暗褐色や乳白色で、体側には不明瞭なちりめん模様が見られる。尾鰭は体色と同色で、その他の鰭は透明である。本種の分布地は西日本の暖流域にあるが、生息情報は多くない。
生息・生育状況	県下の生息環境は岩礁域にある潮間帯の潮溜りや潮下帯などの沿岸域の海藻が繁茂する岩場であり、海藻の間や岩礁の隙間に潜んでいることが多い。このような環境は海岸域の護岸開発によって人為的改変の影響を受けやすい場所である。また、本種は全国的にも生息情報の乏しい種であり、その分布も西日本海域に限られている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	埋立や護岸整備などの人為的な改変などの攪乱により、生息環境の減少や劣化が懸念される。本種の生息域を直接改変することがなくても、その周辺で構造物が構築されると海流の流れに変化が起こって、底質の改変が起こって生息に不適となる可能性もある。
特記事項	本種は <i>F. erythraeus</i> として扱われることもあるが、ハワイを模式産地とする <i>F. erythraeus</i> の原記載と比較すると、背鰭軟条数、吻の長さやその背縁隆起に相違が認められる。このためこの種の新参異名とされていた本種を有効と判断した。本種は熊本県天草から 1972 年に記載された種である。県下の標本はいずれも単独で採集されているが、まったく同一地点でも採集されており、マイクロハビタットへの志向性があると思われる。
産地情報	呉市（蒲刈, 川尻）、福山市（福山, 内海）、東広島市（安芸津）

吉郷英範 2014. 庄原市立比和自然科学博物館収蔵のトゲウオ目魚類（硬骨魚類）. 比和自然科学博物館研究報告, 55: 279-326. 4 pls.  
 吉郷英範 2018. 広島県から記録された海産魚類目録. 比和自然科学博物館研究報告, 59: 127-193. 5 pls.

(吉郷英範)

**キツネメバル** 情報不足(DD) DD-a

*Sebastes vulpes* Döderlein, 1884

スズキ目 メバル科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長 35 cm に達する。岩礁域に生息する。暗灰色から黒色の横縞が背鰭棘条部と軟条部から下方に広がり、尾柄も同様の色彩をしている。同属のタヌキメバルとの分類は非常に難しい。尾鰭後縁の模様、涙骨の棘の性状が分類上有用とされている。コウライキツネメバルは本種のシノニムとして扱われている。卵胎生で小型の甲殻類や魚類を食べる。広島県ではまれである。
生息・生育状況	情報不足である。瀬戸内海に生息しているとのネット情報はあるが確定した文献等は現状確認できず、今後の情報収集が待たれる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	不明。
特記事項	—
産地情報	呉市（蒲刈）

坂井陽一・越智雄一郎・坪井美由紀・門田 立・清水則雄・小路 淳・松本一範・馬淵浩司・国吉久人・大塚 攻・橋本博明 2010. 瀬戸内海安芸灘の浅海魚類相—ホシササノハベラとホシノハゼの分布に注目して. 広島大学大学院生物圏科学研究科紀要, 49: 7-20.

Muto N, Kai Y, Nakabo T. 2019. Taxonomic review of the *Sebastes vulpes* complex (Scorpaenoidei: Sebastidae). Ichthyological Research, 66 (1): 9–29.

(清水則雄)

**コウライヨロイメバル** 情報不足(DD) DD-a

*Sebastes longispinis* (Matsubara, 1934)

スズキ目 メバル科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	瀬戸内海の生物相をまとめた稲葉（1988）において備讃瀬戸，広島，周防灘，伊予灘と瀬戸内海広くで標本が採集されているが，出現頻度は稀種とされる。近年，尾道近海や東広島市の安芸津等で出現は確認されているものの，類似種ヨロイメバルよりも出現頻度は低い。本種は背鰭棘が 13 であることで，通常 14 のヨロイメバルと識別が可能。
生息・生育状況	沿岸の岩礁域に生息する。伊豆半島，和歌山県紀伊水道から下関までの瀬戸内海，山口県日本海沿岸，九州北部沿岸，さらには朝鮮半島南部にかけて出現がみとめられ，瀬戸内海を分布の中心域とする特殊な分布パターンを有する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	カサゴやメバル類の中で生息分布が比較的南北に狭い魚種であり，温暖化による水温環境の変化に影響を受けやすい種である。生息密度の高い魚種ではないため，今後の推移に注意を要する。
特記事項	—
産地情報	広島市（佐伯区），尾道市（尾道），東広島市（安芸津），江田島市，大崎上島町

Matsubara, K. 1936. Studies on the scorpaenoid fishes of Japan. III. On the external and internal characters of *Sebastichthys longispinis* Mihi and *Sebastichthys brevispinis*, nom. nov., compared. Journal of the Imperial Fisheries Institute, 31(2):79–96.

稲葉明彦 1988. 増補改訂 瀬戸内海の生物相 II. 475pp. 広島大学理学部附属向島臨海実験所，広島。

(坂井陽一)

**モヨウダイナンギンポ** 情報不足(DD) DD-a, DD-b

*Dictyosoma tongyeongensis* Ji & Kim, 2012

スズキ目 タウエガジ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	本種は近年韓国から記載された種で、日本では富山湾と広島県からのみ報告されている種である。体長 25 cm 程度。吻はやや尖り、体側には黄褐色で小さな梅花斑が散在する。県産標本では背鰭が 57~61 棘 9~12 軟条、臀鰭が 45~48 軟条、胸鰭が 11~12 軟条。同属のダイナンギンポ <i>D. temminckii</i> やベニツケギンポ <i>D. rubrimaculatum</i> とは鰭条数、頭部の形状、斑紋、上顎後端位置、体側の側線配列、胸鰭や最終背鰭棘条の長さ、鰭始部遊離神経間棘等に違いが見られる。県下では浅海域で周年見られ、潮通しがよい転石帯で見られることが多い。
生息・生育状況	県下では岩礁域にある潮間帯の潮溜りや潮下帯などの沿岸域で確認されている。岩場や転石帯で見られ、岩礁の隙間に潜んでいることが多い。倉橋島では周年水深 5 m 未満の水域で確認されているが、能登半島（日本海）では水深 30 m 以深の水域から採集されている。広島県内でよく観察される場所は転石が多く、その石の隙間に潜んでいる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	埋立や護岸整備などの人為的な改変などの攪乱により、生息環境の減少や劣化が懸念される。本種の生息環境には転石の間に間隙があることが共通しており、生息域を直接改変することがなくても、その周辺で構造物が構築されると海流の流れに変化が起こって、間隙が埋没するような変化が起こって生息に不適となる可能性もある。
特記事項	県下では 2001 年に未記載種として報告していたが、その後韓国の標本に基づいて新種記載された。広島県の標本は原記載や日本海産標本に基づく記載よりも背鰭軟条数が多い (9~12 本で通常 11~12 本 vs. 7~10 本) ことで異なる。このことから日本海と瀬戸内海の各個体群ではそれぞれ分化している可能性もあるが、本種と考えられる日本海産稚魚とは形質が一致することから個体変異の範囲内と判断した。
産地情報	呉市 (倉橋), 福山市 (福山, 内海), 東広島市 (安芸津)

Kai, Y., Ikeguchi S., Kim J.-K. and T. Nakabo 2015. First Japanese record and a revised diagnosis for *Dictyosoma tongyeongensis* (Osteichthyes: Perciformes: Stichaeidae). *Species Diversity*, 20: 107-114.

吉郷英範・吉郷飛翠 2018. 広島県の魚類 7 (吉郷 2018 の補遺). *比婆科学*, 263: 23-32. 1 pl.

(吉郷英範)

**セトカジカ** 情報不足(DD) DD-a

*Astrocottus matsubarae* Katayama, 1942

スズキ目 カジカ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	全長 40 mm ほどの小型種である。水深 10~15 m ほどの礫石底に生息する。体全体が微細な鱗で覆われる。体色は体の前半部が暗黒褐色で後半部は茶褐色、腹部が白い。産卵期は 2~3 月で抱卵雌の腹部は大きく膨らむ。瀬戸内海の固有種とされてきたが、近年では伊勢湾や三河湾、英虞湾、山口県日本海沿岸、宮城県女川湾などでも確認されている。水産上の価値はない。
生息・生育状況	沿岸域の水深 10~15 m ほどの礫石底に生息する。Watanabe (1960) では向島の標本が使用されている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	存在を脅かす要因として底質の攪乱が考えられる。
特記事項	—
産地情報	広島市, 呉市, 竹原市, 三原市, 尾道市 (向島), 福山市, 大竹市, 東広島市, 廿日市市, 江田島市, 大崎上島町

木村祐貴・新野洋平・坂上 嶺・佐々木司・清水則雄 2014. 広島大学総合博物館に収蔵された魚類標本: 1909-2013 年. 広島大学総合博物館研究報告, (6): 71-99.

清水則雄・門田 立・坪井美由紀・坂井陽一 2010. 潜水センサスを用いた瀬戸内海倉橋島における浅海魚類相—出現魚種の季節的消長—. 広島大学総合博物館研究報告, 2: 43-52.

(清水則雄)

## イダテンカジカ 情報不足(DD) DD-a, DD-b

*Ocynectes maschalis* Jordan & Starks, 1904

スズキ目 カジカ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長 10 cm 程度になり、背鰭は 2 基で第 1 背鰭が 8~10 棘、第 2 背鰭が 13~14 軟条、臀鰭は 10~11 軟条、胸鰭は 13~15 軟条、腹鰭は小さくて 1 棘 2 軟条である。本種の体型は淡水域に進出するカジカ属魚類によく類似しているが、頭部背面に房状の皮弁が 3 対見られることで異なる。また、他のカジカ科魚類よりも頭部が小さく、眼の後方に二つの暗色斑がある、臀鰭軟条数が少ないことで県下に生息する他のカジカ科魚類と識別できる。本種の成魚には体に暗色横帯があるものの、未成魚では体が一樣に緑褐色で頬部が明色となる。分布の南限は太平洋側では九州南部、日本海側で九州北部とされ、瀬戸内海水域にも生息記録がある。
生息・生育状況	県下の生息環境は、沿岸部の外海に面した潮通しがよい、大潮の干潮時に汀線際となる岩礁域にある潮間帯の潮溜りや潮下帯などである。いずれも人為的改変の影響を受けやすい場所であり、海岸域の護岸開発によって本種の生息に適した環境が減少しており、潜在的に生息可能な環境も多くはない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	埋立や護岸整備などの人為的な改変などの攪乱により、生息環境の減少や劣化が懸念される。本種が見られる環境は海藻が茂った岩礁などの間隙があることが共通しており、生息地を直接改変することがなくても、その周辺で構造物が構築されると海流の流れに変化が起こって、海藻の減少などの変化が起こって生息に不適となる可能性もある。
特記事項	瀬戸内海水域では愛媛県や大阪府などからも知られており、本県でも比較的外海に面した地域で見られる。確認地点は自然海岸が残された地域で、護岸等の整備がされていない場所である。海藻類の茂った岩礁帯で見られ、岩礁の隙間に潜んでいることが多い。県下では冬から初夏に採集されており、繁殖活動や水温状況の変化にともなって垂直移動を行っている可能性もある。
産地情報	広島市（東区）、呉市（呉、蒲刈、豊）、尾道市（因島）、福山市（福山、内海）

清水孝昭 2006. 愛媛県伊予灘島嶼部沿岸域より得られた魚類. 徳島県立博物館研究報告, 16: 15-64.

吉郷英範・吉郷飛翠 2018. 広島県の魚類 7 (吉郷 2018 の補遺). 比婆科学, 263: 23-32. 1 pl.

(吉郷英範)

## オビアナハゼ 情報不足(DD) DD-a

*Pseudoblennius zonostigma* Jordan & Starks, 1904

スズキ目 カジカ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	広島で採集された個体標本は 1930 年代に尾道市向島および三原市近海で採集されている。瀬戸内海の生物相をまとめた稲葉 (1963) において、本種は広島東部水域の普通種とされていた。さらにその改訂版 (稲葉 1988) においても、瀬戸内海全域に分布する普通種とされていた。しかし、以後の出現記録はきわめて乏しい。大阪市立自然史博物館における瀬戸内海産魚類標本目録 (8886 点 429 種; 波戸岡・花崎 2017) においても、本種標本は存在しない。分布域・個体数ともに激減している可能性がきわめて高い。
生息・生育状況	青森県から長崎県までの日本海沿岸、福島県から高知県までの太平洋沿岸の岩礁に生息する。広島県下での記録は 1930 年代の標本に限られる。ただし、伊予灘 (山口県屋代島、愛媛県伊方町) では、2018 年・2019 年に出現が確認されている (佐藤 未発表)。
存在を脅かす要因・保全の留意点	瀬戸内海における本種の顕著な減少を導いた要因は不明。
特記事項	—
産地情報	三原市 (三原)、尾道市 (向島)

稲葉明彦 1963. 瀬戸内海の生物相. 352 pp. 広島大学理学部附属向島臨海実験所, 広島.

波戸岡清峰・花崎勝司 2017. 瀬戸内海産魚類標本目録. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第 48 集, 204 pp. 大阪市立自然史博物館, 大阪.

(坂井陽一)

**ニラミハゼ** 情報不足(DD) DD-a

*Heteroplopmus barbatus* (Tomiyama, 1934)

スズキ目 ハゼ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	全長 40 mm ほど。日本海では、青森県から長崎県周辺の東シナ海、有明海、太平洋側では青森県から土佐湾までに生息し瀬戸内海にも生息している。冬に流れのある浅場の砂泥地が上がってることが知られている。頭部が扁平していること、下あご下部に突起があること、背鰭前方に鱗があることなどで区別できる。琉球列島にさらに別種が存在する。鈴木（2004）は西表島からニラミハゼ属の一種と見られる報告をしており、現在、分類学的研究が進められている。
生息・生育状況	情報不足である。瀬戸内海に生息しているとのネット情報はあるが確定した文献等は現状確認できず、今後の情報収集が待たれる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	情報不足である。
特記事項	—
産地情報	なし

清水孝昭 2001. 愛媛県伊予市沿岸域の魚類目録. 徳島県立博物館研究報告, 11: 17-99.

重田利拓・吉川浩二・薄 浩則・石津敏之・徳村 守 2003. 広島湾における暖海性魚類の出現とこれに伴う新たな問題. 水産海洋研究, 67 (4): 273-277.

(清水則雄)

**シマフグ** 情報不足(DD) DD-a

*Takifugu xanthopterus* (Temminck & Schlegel, 1850)

フグ目 フグ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長 50~60 cm ほどまで成長する。腹鰭がないフグ型の典型種である。瀬戸内海と有明海に多い。体は小棘におおわれ体背方に紺色の帯が数本斜走する。英名 <b>Striped puffer</b> はこれに由来する。鰭はすべて黄色である。卵巣と肝臓は強毒、腸は弱毒、筋肉・皮膚・精巢は無毒。幼魚は内湾の砂泥底に生息する。成魚になると岩礁周辺に移る。遊泳力が有り行動範囲は広い。初夏に沖合から河口域へ移動して産卵する。甲殻類、イカ類、クモヒトデ類、魚類を食べる。市場での流通量は多くはない。
生息・生育状況	芦田川河口ではかつて多く見られたようだが、現在ではあまり見られない。広島大学総合博物館には呉市蒲刈島で捕獲された標本が保管されている。比和科学博物館には廿日市(宮島)や大竹市で捕獲された標本が保存されている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	情報不足である。
特記事項	フグ科魚類は多種類で、互いに酷似している。また自然界で雑種もよく見受けられる。このため種の査定が困難で毒性の有無の判定が難しい場合が少なくない。したがって、素人料理はきわめて危険で避けるべきである。
産地情報	広島市、呉市、竹原市、三原市、尾道市、福山市(福山)、大竹市、東広島市、廿日市市(廿日市)、江田島市、大崎上島町

角田俊平 1973. 芦田川河口域の海産魚について. 広島大学水畜産学部紀要, 12 (1): 83-87.

中坊徹次 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 1735 pp. 東海大学出版会, 東京.

(清水則雄)

**カワヨシノボリ斑紋型 地域個体群(LP) LP-①, LP-②**

*Rhinogobius* sp. Blotch Type

スズキ目 ハゼ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概要	<p>カワヨシノボリ類は体長 5 cm 未満で胸鰭は 14~17 軟条, 比較的大きな卵を産み, 淡水域で一生を過ごす。このうち斑紋型は雄の第 1 背鰭が烏帽子状で第 4 棘がもっとも長い, 胸鰭の上部付け根には楕円形の暗色斑紋があり, 尾鰭に赤色の横縞模様を持つ, 雄の第 1 背鰭には藍色の大きな斑紋が存在するなど分布が隣接する無斑型や宍岐-佐賀型と識別できる。また, 広島県の本個体群は背鰭前方鱗が 8~13 枚でその先端は左右の主鰓蓋骨後端を結ぶ線よりも前方に達する。中国地方西部から九州北西部にかけての日本海流入河川, 瀬戸内海西部の流入河川に分布する。八幡高原は広島県で唯一の本個体群が生息する地域である。</p>
生息・生育状況	<p>県内の生息地は八幡高原内の柴木川のみであり, その分布は高津川水系と太田川水系の河川争奪にともなって本地域に取り残されて形成された可能性がある。生態的に競争関係にあるトウヨシノボリ類が生息地に侵入し, 本種はここ十数年で激減してほとんど確認できなくなった。このため絶滅の恐れのある地域個体群として本型を選定する。</p>
存在を脅かす要因・保全の留意点	<p>孵化した仔魚はすぐに底棲生活にはいるため, 生息環境には仔魚が下流に流されないような流れの緩い場所が必要であり, 様な速い流れになってしまうような護岸を施すと本種は生息できなくなる。また, 近年急速に増加したトウヨシノボリとは生態的地位が同一であり, この外来種のために圧迫を受けて激減している。また, 水産有用種の放流にともなってカワヨシノボリ他型が侵入した場合には交雑も懸念される。</p>
特記事項	<p>カワヨシノボリは一生を淡水で過ごして大きな卵産み, 胸鰭軟条が少ないことでヨシノボリ類他種から識別される。本種には将来的に種・亜種が分けられる可能性がある 5 型以上の表現型が確認されており, 遺伝的にも地理的な分化が認められているものの, 表現型と遺伝型の整合が不十分であることで正式な公表はまだされていない。</p>
産地情報	<p>北広島町 (芸北)</p>

吉郷英範 2003. 八幡高原(広島県芸北町) のカワヨシノボリ. ホシザキグリーン財団研究報告, 6: 27-42.

吉郷英範 2011. 分布域東限に生息するカワヨシノボリ (硬骨魚類綱: スズキ目ハゼ科)の形態. 比和科学博物館研究報告, 52: 339-358.

(吉郷英範)

